法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-14

ベルギーにおける岩倉使節団

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
47
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
230
(終了ページ / End Page)
170
(発行年 / Year)
2000-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020982

ベルギーにおける岩倉使節団

宮永孝

はじめに
一　ベルギーにおける岩倉大使一行の旅程
二　岩倉大使の私設記録係のベルギー観
三　ベルギー側は、日本および日本使節団をどのように見ていたのか
四　岩倉大使に対するベルギー政府の反応
あとがき

はじめに

西暦二〇〇〇年は、日本とベルギーとの関係がはじまって約四一〇年になる。それは宗教を通じて人的な交流がはじまったという意味である。

はじめて日本にやって来たベルギー人は、イエズス会の宣教師テオドーズ・マンテル（マルテルとかマンテレスともいう、一五六〇～一五九三）であった。

マンテルは、リエージュの北西約一九キロに位置するトンゲレン（トングルともいう）の町に生まれ、二十歳のときイエズス会に入

会した。[1]

数年後インドにおもむき、神学を修めたのち、日本布教の途にのぼり、一五八八年八月十六日（天正16・6・24）長崎（公領地）に上陸した。その後、平戸の周辺においてひそかに布教に従事[2]したようだが、秀吉の禁教令のため平戸領主から他の六名の宣教師とともに毒殺されようとしたので、一五九二年十月九日（天正20・9・4）仲間の神父らとともに日本をはなれマラッカにむかい、翌年同地で亡くなった。

一方、日本人はいつごろベルギー（この国が国家として独立したのは一八三〇年）の地をふんだのであろうか。鎖国下、公然とこの国を訪れた者は、まず皆無であったとおもわれるが、幕末になると、オランダ留学生（幕生）や薩摩藩の密航留学生、幕使（徳川昭武一行）が、維新後は政府の顕官らが視察や研修におとずれるようになった。

ベルギーは、立憲君主国である。

面積は、三万五一二平方キロ。こんにちの人口は、およそ九九七万八千人である。

ベルギーという名の語源は、ローマ時代この地に住んでいたケルト系の〝ベルガエ〟(Belgae) 族から来ているらしい。ベルガエ族は、紀元前五七年にシーザーの軍隊によって征服された。フランス語系のベルギー人は、国名を「ベルジック」と発音し、オランダ語系のものは「ベルヒェ」と呼んでいる。

この小国は、北はオランダ、東はドイツ、南東はルクセンブルク、南と西はフランスと国境を接している。地形的にいえば、北西部が低地帯、中部が丘陵地、南東部は高地となっている。

国土の位置は、北緯五〇度前後であり、気候はメキシコ海流のおかげで比較的温暖である。冬はそれほど寒さがきびしくなく、夏は涼しく、しのぎよい。

オランダもそうであるが、冬は暗い空がつづき、陰うつであり、湿度は比較的たかい。

農産物としては、大麦・小麦・オート麦・ライ麦・ジャガイモ・テンサイなどを産し、産業としては鉄鋼や繊維や化学工業のほか、皮革や製紙工業などがさかんである。

国民は、ゲルマンのオランダ系のフランドル人、ラテンのフランス系のワロン人、ドイツ系などからなり、言語は大別すると三種類使われている。北部ではオランダ語とフラマン語、その南側ではフランス語とワロニー語、東部のドイツ国境にちかい所では、ドイツ語とその方言などが用いられている。首都のブリュッセルは、オランダ語とフランス語を用いている。

宗教は、国民の大部分がカトリック教徒であり、プロテスタントはすくない。

いまでこそ交通機関の発達のおかげで、日本人は気軽にヨーロッパに出かけ、オランダやベルギーを訪れる観光客も多い。日本人はまとまりのない大国よりも、こぢんまりとした小国のほうが好きな民族なのかもしれない。いまから約百数十年まえの明治初年ごろ、とくにベルギーをおとずれる日本人は、かならずしも多くはなかった。

本稿は、維新後まもない明治初期に、ベルギーを訪れた特命全権大使・岩倉具視（ともみ）一行についてのべたものである。

岩倉一行は、俗に「岩倉使節団」とよばれ、明治四年十一月（一八七一・一二）から同六年（一八七三）九月まで、約一年十ヵ月米欧を巡歴し、条約改正の予備交渉をおこない、かたわら文明国の文物調査などを精力的におこなった。

訪れた国々の調査・見聞録は、のちに大政官少書記官・久米邦武の編修により、『特命全権大使米欧回覧実記』（全一〇〇巻・五編五冊、以下『実記』とする）として刊行された。

久米によると、この『実記』は、岩倉大使のいわば、

「世界使命の報告」[3]

でもあった。

岩倉一行は、いつ、何んの目的でベルギーをおとずれ、どのくらいの期間滞在し、何を行なったのであろうか。日本側の資料からうかがうことができない一行の行実を、現地の新聞報道によって、解き明かそうというのが本稿の抱負と意図でもある。

一　ベルギーにおける岩倉大使一行の旅程

岩倉使節団がベルギーに滞在したのは、明治六年（一八七三）二月十七日から同年同月二十四日までの、わずか八日間にすぎない。

まずベルギー滞在八日間の旅程を日ごとにしるすと、つぎのようになる。

二月十七日。晴天。

一行は同日の午後三時四十五分、パリの「北駅」（『実記』では、「南駅」とある）より汽車でベルギーにむかった。何の変哲もない、冬枯れの平野を東北にむかって走ること約二三〇キロ。夕ぐれ、一行はフランス国境の村ケヴィに到着した。ここでフランス側の接待係とベルギー側の接待係とが交替した。

この間のようすを『実記』は、

> 東北ニ走ル、仏ノ東境、ミナ平野ニテ、殊ニ観ルヘキモノナシ、薄暮ノ後ニ、仏国境ニ至レハ、白耳義（ベルギー）国政府ヨリ、接伴トシテ、「リューデナンド、コロネル、バロン、ヂョリー」、「バロン、アネサン」氏、及ヒ書記官ト、駅マテ出迎フ、停輪の間ニ款接（かん）［もてなし］ヲナシ、又発シ、「モンズ（モンス）」駅ニ至ル、
>
> 巴黎（パリ）ヨリ「モンス」マテ銕（てつ）［銕は鉄の古字］路程百三十六英里（マイル）

と記している。注・以下、（ ）と［ ］内は、引用者による。

二月のこの季節、パリの東北やベルギー、オランダは寒く、空は灰色というより、黒色といったほうがよさそうであった。いま現地で暮らす邦人によると、低くたれこめた雲もどちらかといえば黒色で、ときに不気味な感じさえあたえる、という。墨（ぼく）色の冷えびえとした空のもと、岩倉一行はベルギーにむかったのであるが、汽車の窓にみられる景色は、葉をすべて落してしまった樹木、枯野のなかにときどき見かける農家や緑野であったろうか。

こんにち『実記』をひもとくと、われわれ読者はまず漢語と古風な表現に面くらい、漢和辞典なしではとてもそれをよむことはできない。ことにいちばんこまるのは、固有名詞（地名、人名）の片仮名表記が不正確なことである。

それを正してくれるものは、現地で発行された新聞記事である。『実記』を正確に読みとるためには、新聞記事は不可欠の資料かと

おもわれる。

『実記』は、一行をのせた汽車が、フランス国境の何んという所で停車したのか、何も語っていない。しかし、『ガゼット・ド・モンス』紙（二一・一八付）が伝えるところによると、フランス領の

——ケヴィ（Quévy）村

であったことがわかる。

国境の村であるから、汽車はいったんここで止まるのがふつうであり、旅行者は、入国審査をうけ、通関手続を経なければならない。岩倉一行は、ケヴィで

シャルル・デ・フローテ……駐日ベルギー公使（明治6・11～同17・2在任?）
のち横浜で死去（明治17・9・16）
フェルディナン・ジョリー男爵……参謀本部付陸軍中佐、陸軍士官学校副校長
アルベール・ダントン男爵……のち駐日ベルギー公使
シャルル・デュルセル伯爵……のち駐日ベルギー公使館書記官

らのあいさつをうけたのち、ふたたび車中の人となり、モンス（エイノー州の州都、ブリュッセルの南五五キロ）へとむかった。

モンスの駅は、「白耳義（ベルギー）ノ国境ニテ、頗ル一庶邑（しょゆ）［小さな町］ナリ」と『実記』にある。

モンスは道路や鉄道交通の要衝とされ、ベルギー中央炭田の中心でもある。丘の斜面につくられたこの町は、[4] シーザーによって造られた砦を起源とし、十世紀ごろすでに町としての形がととのっていた。

夜九時半ごろ、岩倉一行はモンスでいったん下車すると、儀仗兵の捧（ささ）げ銃（つつ）や軍楽隊が演奏する「君が代」で迎えられた。

一行をプラットフォームに出むかえたベルギー側の面々は、

キャラマン・シマイ公……エイノー州知事
ドレス……モンス市長
パレス……エイノー州の書記
デマツエレス大佐……儀仗兵（第三猟歩兵）の指揮官
モール将軍……エイノー州司令官
デュティユウル中佐……モンスの司令官

などである。

一行は、モンス駅(5)の一等待合室でベルギー側の歓迎の辞をうけ、それに対して岩倉が答辞をのべたのち、ベルギー王室から差しまわされた特別列車に乗ると、首都ブリュッセルを目ざした。ブリュッセルの「ミディ駅」に着いたのは、夜の十一時二十分ごろのことであった。

それから一行は、馬車に分乗すると、旅宿である「ベルヴュ・ホテル」にむかい、そこに旅装をといた。ブリュッセルの夜気は冷たく、摂氏二度ほどであった。『実記』に、「此夜寒厳ニシテ、外気三十六度ナリ」とある。

宿泊費はベルギー政府が負担し、飲食費だけは日本側が払った。

モンスからブリュッセルのホテルに入るまでの様子については、『木戸孝允日記』につぎのようにある。

（前略）使節の迎として出せりモンスに至る已に十字なり此処のステーションへ王の汽車迎として差越し兵隊の警衛等甚丁寧を尽せり小憩して此車に乗る此地の人民群集・如山十一字半ブロシュルス（ブリュッセル）に着しベルヒュー（ママ）ホテルに至り八十六番の室に泊す

日本使節一行の旅宿となった「ベルヴュ・ホテル」は、『実記』によると、「王宮ノ側」にあったという。もっと正確にいえば、ロワ

イヤル広場七番地にあり、正式には「オテル・ベルヴュ・エ・ド・フランドル」といい、客室百ほどの高級ホテルであった。

一行は、ベルギーでの第一夜をこのホテルですごした。

岩倉大使一行のベルギー入国について、現地の新聞はかなり大きな記事を掲げている。

たとえば『ジュルナル・ド・リェージュ』*Journal de Liège* 紙（一八七三・二・一九付）の「さまざまな出来事（フェ・ディヴェルス）」は、つぎのようなものである。長くはなるが、全文を引いてみよう。同紙の記事は、『ガゼット・ド・モンス』紙（一八七三・二・一八付）から転載したものである。

さまざまな出来事

二月十八日付の『ガゼット・ド・モンス』紙に、つぎのような記事がみられる。

月曜日（二・一七）の夜九時ごろ、大勢のひとびとは駅［モンス駅］にむかった。駅ではパリからブリュッセルにむかう日本大使に対して、公式の歓迎がおこなわれようとしていた。

ベルギー政府は、理由があってのことであろうが、日本の使節たちを歓迎することをひじょうに重視しているようだ。外国人に対して、好意的な党派が勝利をおさめて以来、日本帝国は世界じゅうの国々といつまでも交誼をむすびたいとおもっている。このことは、じっさい周知のことである。

いまや日本の港は、世界と交易するために広く開かれているので、わが国は直ちに日本において蒸気機械や鉄道に関するものの重要な販路をみいだした。というのは、日本はアジアの強国のなかで、最初に鉄道を敷設した国だからである。

いまのべたことは、最近、駐日ベルギー任命されたド・フローテ氏の年俸が、三万五千フランであることからも説明がつく。

ベルギー政府は、岩倉一行の受け入れと歓迎に重大な関心をもったのであるが、その伏線を張ったのがこの記事であったかとおもえる。

ひょっとすると、この記事の出所は、ベルギー外務省あたりであったかもしれない。ベルギー政府が日本人一行を好意をもって迎えた意図と動機については、あとでもう一度のべることにし、先を急ごう。

記事はさらにつづく。

日本使節団の目的というのは、世界じゅうを歩きまわり、文明のすべての中心地において、アジアで応用できるかも知れない有用な事柄をみつけ、日本帝国をすっかり刷新することに手を貸すことなのである。

ベルギーの国王陛下は、きのう日本の使節を出迎え、かつかれらをブリュッセルまで案内するための任務をおびた代表を国境に遣わした。その代表とは、外務省の局長ド・フローテ、参謀本部の中佐で男爵のジョリー、陸軍士官学校の副校長で男爵のダントン、駐日ベルギー公使館の書記官ユルセル伯爵の諸氏である。

これらの紳士たちは、地方政府の建物で泊ったのち、午後七時半ごろお召し列車でモンスよりケヴィ［フランス国境の村］にむけて出発した。かれらには日本人の秘書官が同行した。この日本人は、使節団よりも一足先にブリュッセルにおもむき、使節団のために「ベルヴュ・ホテル」に部屋を確保した。

午後九時半、日本の使節らは屋根のついたモンスの駅に到着した。ファン・ニエスベックが指揮をとる第三猟歩兵の分遣隊の儀仗兵らは、捧げ銃をし、らっぱを吹いた。そのあと軍楽隊が日本の国歌を吹奏したが、そのメロディは理解できないものであった。

ミカドの使節たちは、一等の待合室にみちびかれた。その待合室は、りっぱな調度や花でいっぱいの植木台がたくさん置いてあり、迎賓室に変わっていた。

日本使節は、六名（ママ）からなる。みな洋服を着ている。黒いフロックコート、毛皮のついたりっぱなパルトー（短いコート）、いま流行しているシルクハットなどを身につけていた。（このあと二行ほど、活字不鮮明につき、判読不能）。……

なぜなら、かれらは小柄なうえ、きゃしゃであり、髪は縮れていたからである。かれらはパリ風の装いをしてはいたが、不機嫌そうにみえた。

ここに使節たちの名簿があるが、その氏名と身分によって、この使節団が重きをおかれていることがわかる。

一　木戸……内閣顧問

二　オワクラ（岩倉）……外務大臣
三　大久保……大蔵大臣
四　山口……外務次官
五　伊藤……公共事業次官
六　通訳

ここですこし注釈が必要になるが、木戸孝允の身分は日本流にいえば「参議」である。岩倉具視は外務大臣ではなく、「特命全権大使」である。大久保利通は「大蔵卿」、山口尚芳は「外務少輔」、伊藤博文は「工部大輔」である。

記事はつづく。

エイノー［ベルギー南部の州、州都モンス］の知事でキャラマン・シマイ公は、極東からやって来た主席大使に言葉をかけ、歓迎の意を表した。

主席大使は知事のあいさつに対して答え、そのスピーチを使節団員のひとりが、つぎのように訳した。

――知事閣下、わたしたちがベルギー領に入ったときに示された懇篤なもてなしに、感謝のことばもありません。わたしたちが受けたすばらしい歓迎について、天皇陛下に伝えることは、大きなよろこびでもあります。また同行の者たちにもおかけいただいた言葉を陛下にお伝えすることは、よろこびでもあります。

わたしたちは、すばらしい歓迎に心をうたれ、感謝するとともに、心から謝意をのべたくおもいます。

ついで知事は、主席大使につぎの面々を紹介した。

モール将軍……州の司令官
ドレス氏……モンスの市長
デマツエレス大佐……第三猟歩兵分遣隊の指揮官

パレス氏……州の書記
デュティユウル中佐……モンスの司令官

モール将軍は、分遣隊の儀仗兵の指揮官ファン・ニエスベック大尉を紹介した。

こんどは日本の主席大使が、キャラマン・シマイ公に対して、随員をひとりひとり指し示し、その氏名、肩書、身分などを説明した。

ついで日本使節団は、礼装しているわが国の高官らを前にして軽く会釈すると、パルトーをふたたび着、汽車に乗った。その間ふたたびラ・ブラバンソンヌ［ベルギー国歌］が演奏され、ついで日本の国歌が奏された。

日本使節団は、月曜日の夜十一時二十分、モンスまで出迎えにおもむいた特別列車で、ミディ駅に到着した。これらの著名な訪問者らは、駐日ベルギー公使デ・フローテ、ジョリー中佐、大尉で男爵のダントン、国王の副官でかつ駐日ベルギー公使館の書記官でもあるユルセル伯爵らによって、国境で出むかえをうけた。

国王の副官が、王室差しまわしの馬車で、ミディ駅に着いた日本使節らを迎えにやって来、かれらを「ベルヴュ・ホテル」に案内した。

また『ランデパンダンス』*L'Indépendance* 紙（二・一八付）がつたえる岩倉一行のブリュッセル到着のニュースは、つぎのようなものである。

日本使節はけさ（ママ）ブリュッセルに到着し、「ロテル・ド・ベルヴュ」に投宿した。部屋の用意はすでにととのっていた。岩倉、木戸、大久保、伊藤、山口氏らの氏名はすでにお知らせしてあるが、これらの諸氏以外に秘書官が五名いる。

すなわち、フ（田辺）ァナベ、何（か）、クリモト、杉浦、安藤の諸氏である。会計係は二名、フ（田中）ァナカとトミタ氏らである。個人秘書には久米氏、医師としてはフク（福井）ニ氏がいる。W・パーソン氏もいる。

一見すると、この記事は、それほど重要であるとはおもえないが、岩倉一行の人数をあきらかにしている点で価値は大きい。岩倉使節団は、横浜を出帆したとき、総員四十八名ともに五十名余(6)ともいわれ、大所帯であったが、各国巡歴ちゅうかなりの人員が

移動したため、各国における使節団の構成員を知ることはなかなか容易ではない。

だからいま引いたこの記事は、読みすてるわけにはいかないのである。

記事にみられる秘書官五名とは、

田辺太一（やすかず）……外務少丞、一等書記官。

何礼之（かのりゆき）……外務六等出仕。

クリモト某……もと幕臣・栗本鋤雲の嗣子、栗本貞次郎のこと。同人は明治三年から同五年までフランスに留学した。のち岩倉使節団の通訳（二等書記官待遇）となる。

杉浦弘蔵……のちの畠山義成。三等書記官。通訳兼記録係。

安藤忠経（ただつね）……外務大録、四等書記官。

らであり、会計係とは、

田中光顕（みつあき）……戸籍頭、会計兼務。

トミタ某……イギリスで法律をまなんだ富田貞次郎（山口出身）のことか。あるいはアメリカで経済学をまなんだ富田鉄之助（仙台出身）のことか。

である。

個人秘書とは、

久米丈市（たけいち）（邦武）……権少外史

医師のフクニ（フクイ）については不詳。W・パーソンは、岩倉使節団がワシントン滞在ちゅうに顧問としてやとい入れたアメリカ人である。木戸はこのパーソンと条約草案のことでたびたび協議をこらしている。

この記事どおりなら、岩倉一行がベルギーに入国したとき、総数十五名ほどであったことがわかる。

二月十八日。

『実記』には空模様について、なんの記載もないが、おそらく曇天であったろうか。

午後一時ニ、宮内省［王宮］ヨリ乗車ニ輪ヲ差配シ、御者ミナ緋衣金装シ、護衛兵隊ヲ具シ、宮内長官来リ迎ヘ、王宮ニ至リ「レオポルト」第二世陛下ニ謁見ス

（『実記』）

岩倉一行が滞在している「ベルヴュ・ホテル」から王宮までの距離は、歩いてもほんのわずかであるが、一行は王室差しまわしの馬車でおもむいた。

昨日（二一・一八）の午後一時半に、日本使節は国王の副官によって王宮にみちびかれ、国王両夫妻の謁見をうけた（『ジュルナル・ド・リェージュ』）。

また国際紙『ル・ノール』*Le Nord*（二一・二〇付）の記事は、つぎのようなものである。

六頭引の馬車に乗った礼装した御者らは、「ベルヴュ・ホテル」へ使節らを迎えにおもむき、かれらを王宮に案内した。使節らはまたしきたりに従って、ホテルまで送ってもらった。ギローム将軍が使節らに随行した。

王宮に着くと、歩兵らが軍楽隊の演奏をもって使節らに敬意を表した。日本人らはヨーロッパ人とおなじ服装をしていた。これには好奇心の強い者はがっかりさせられた。

王宮に着いた岩倉らは、式部長官の案内で謁見の間に行くと、国王レオポルド二世に面謁し、つぎのような口状をのべた。

我カ天皇我カ日本国ト白耳義トノ間ニ今幸ニ存在スル友誼ヲ益ス厚カラシメンコトヲ欲シ爰ニ臣等ヲ特命全権大使トシテ貴国ニ派遣セラレタリ臣等使命ノ趣ハ今辱ク陛下ニ咫尺シ［きわめて近い距離、ここでは拝謁する意か］奉リ恭ク奉呈スル所ノ我カ天皇ノ国書ニ詳カナレハ陛下能ク之ヲ了知シ［悟り知る］給フヘシ

我カ国ニ於テ大使ヲ貴国ニ派遣セシハ今日ヲ以テ始トス臣等特ニ其撰ニ当リ正ニ貴国ノ敬愛ニ厚キコトヲ見ルワ其幸福光栄何事カ之ニ如カン臣等又此序［この口上］ヲ以テ陛下ノ寿昌［長生きして栄える］ヲ祝シ奉リ且貴国ノ平安ヲ祈ル(7)

このあと国王の答詞があり、それより皇后の部屋に行き、あいさつした。皇后は喪中につき黒い服を身につけていた。

謁見式は、三十分ほどで終ったものか、木戸は「二字帰寓(8)」とのべている。

同夜、王宮において日本使節のための歓迎晩さん会と舞踏会が催されたのであるが、それまでだいぶ間があったので、木戸は人と会ったり市内見物をしたりしている。

木戸は午後三時、「行政官の長」（不詳）をおとずれ、そのあと田中光顕（会計係）や池田政懋（四等書記官）やポーランド人のロバンという者と四人で、馬車でドライブに出かけた。

かれらはブリュッセル市内の古跡または名所を見たのち、「府外の林」（レオポルド公園か）にいたり、そこの池でスケートをたのしむ市民らを見物した。ホテルにもどると、

周布公平……長州藩の重臣・周布政之助の子。山口農兵隊長。明治四年、兵部省よりフランス、ベルギーに派遣される。のち枢密顧問官。

金槌某……不詳。

河野光太郎……大村藩の出身。木戸のあっせんにより、明治四年ベルギーに留学。その後の消息は不明。

らの訪問をうけた。

夜、木戸は田中、池田らと散歩に出かけた。

二月十九日。くもり。

この日、岩倉一行はゲント（ガン、ヘントともいう）をおとずれた。ゲントは東フランデレン州の州都であり、ブリュッセルの西北西五一キロにある。この市(まち)は、西暦六三〇年ごろ(9)、すでに歴史にその名が現われ、七世紀ごろ、イギリス産の羊毛を輸入して毛織物工業がはじまったとされる(10)。

十三世紀には自由都市となり、以後ヨーロッパ最大の織物工業の都市として繁栄をつづけた。

岩倉一行のゲント訪問について、『実記』はつぎのようにいう。

> 朝十時ヨリ、接伴掛(せっぱんがかり)「ヂョリー」氏、「グルート」氏ノ案内ニテ、皇帝ヨリ乗御(じょうぎょ)ノ蒸気車［王室の特別列車］ヲ仕立(したて)テ、東北ニ走ルコト二十五英里(マイル)ニテ、十一時半ニ「ガンド」府ニ至ル

〝北のベニス〟の異称もあるゲントの当時の人口は、約十二万人であった。一行は駅で州知事（セルクラース伯(11)）や市長（デンターヘルン伯）らの出迎えをうけた。

『実記』によると、岩倉一行はゲントで、

> ハンプトン氏［ヘンプティンヌの誤り］の綿花紡織場と花園
> ラリス氏［ラ・リス］の麻製造場

などを見学している。

ヘンプティンヌの綿花紡織場(12)は、キューバや東インドから綿花を輸入し、五〇〇馬力、一〇〇〇馬力の蒸気の輪をうごかして、日に三千枚の綿布を織っていた。一日に二千から二千五百名の職人が工場に出入りし、男子は日に十五フランの給金をもらい、女子はその半分であった。

工場は五階建てであり、そこでは千五百台ほどの織機がごうごうと鳴っていた。ふつうの白布は、ベッドのシーツ、枕カバー、肌着、

布巾、手ぬぐいなどにして用いるとのことであった。

そのあと一行は、馬車にのり、裁判所・病院・牢獄などをみてまわった。ついでジャン・ジュール・リンデンの花園（植物園[13]）におもむき、園内を歩き、世界じゅうから集めたという、植物などを見学した。

このあと市庁舎で、市長主催の昼食会がひらかれた。会食者の総数は、二十五、六名であった。

昼食後、ラ・リス氏の亜麻の製糸工場をおとずれた。これはヨーロッパ最大の亜麻工場とのことで、工場の建物はレンガでつくられ、五階建てか七階建てであった。日に男女二千五百名ほどの職人が工場に出入りし、織機の数もこれとおなじだけあった。

ゲントの市がある東フランデレン州が、亜麻の産地として有名なのは、川の水質がよいためであった。

良質の麻糸からつくられた布地は、衣服やレースの材料となり、粗悪な布地は、帆布や穀物やくだものを入れる袋として用いられた。

岩倉一行は、午後四時にゲントを立ち、五時ごろ帰館した。同夜八時、王宮で夜会が催され、正装した男女三百名ほどが出席した。

ホテルにもどったのは、午前一時ごろであった。

岩倉一行のゲント訪問は、当然のことながら現地の新聞にニュースとして取りあげられた。

『ジュルナル・ド・ガン』*Journal de Gand* 紙（二一・二〇付）は、つぎのような記事を掲げている。

日本大使

きのう日本使節が、ガンの市をおとずれた。使節に同行していたのは、こんど駐日公使として赴任するド・フローテ、参謀本部のジョリー中佐、大尉で男爵のダントン、技師のバビュ・デスマールおよび大使の随員らである。

外国の貴人らは、けさ十時に王室の特別列車でブリュッセルを立ち、十一時にガンに到着した。かれらを駅で出迎えたのは、州知事のテー・セルクラース伯爵、ガン市長のケルクホーフェ・ド・デンターヘルン伯爵、州の書記のド・グラーフェ、州司令官の副官ストゥケンスの諸氏である。

あいさつをおえたのち、日本の紳士らはルーベルクス氏の工場、ショーム街にあるリンデン氏の植物園、ラ・リス氏のリネン工場などをつぎ

つぎにおとずれた。

日本の紳士らは、とくに機械に興味をしめした。日本ではとても高価な布地が織られるが、しごとはすべて手仕事なのである。かれらはとくにわれわれが用いている原動力についてたびたびメモを取っていた。工場をもっと見学する必要もあったが、時間がなかった。

地方政府が出した軽い食事のあと、日本の紳士らは、四時五分にかれらを運んできた特別列車でブリュッセルにむかった。

木戸はこの日ガンで見学した工場や花園について、「英国にて見るところより一層器械も場所も亦大なるを覚ふ、花樹花草を作るの処に至る皆外国へ輸出すると云」（『日記』）と記している。

二月二十日。くもり。みぞれ降る。

『実記』を見ると、

> 九時二十分ヨリ、接伴掛両人ノ案内ニテ、例ノ如ク、蒸気車ニテ東走スルコト五十二「キロメートル」（約英ノ三十英里）ニテ某駅ニ至ル、「メヨ」［市長の意。］迎テ馬車ニ上リ、三キロメートル（英ノ二英里）ヲ走リテ、「バッカット」［ブラスカット村］ノ砲台ニ至ル

とある。

この日、岩倉一行はベルギー側の接待係デ・フローテやジョリーの案内でブリュッセルより汽車でアンベルス（別称アントウェルペン、ブリュッセルの北四七キロ）にむかい、そこで馬車に乗りかえ、ブラスカット村におもむいた。

ブラスカット村のちかくに、試射場がある。そこで野砲の実射を見学するのがこの日の目的であった。

砲台がある一帯は、草木のない砂地であり、わずかに小さな松の木がみられただけであった。

試射場がつくられたのは、十五年まえのことで、いま二百名（うち士官二十五名）ほどの兵士らが常駐しているとのことであった。

この日は、ことのほか寒く、おまけに風が吹き、みぞれが降った。「寒冱［きびしい寒さ］ハ面ヲ削ルカ如シ」（『実記』）とある。

馬六頭にひかれた野砲四門が試射場にひきだされると、約七五〇メートル、一一五〇メートルの各距離に的をおいて数十発発射された。このあと的を四頭の馬にひかせて射ったり、弾の速度をはかる実験などが行なわれた。

試射の見物をおえた一行は、士官用の食堂で昼食をごちそうになり、のち馬車でブラスカットの駅にもどると、汽車にのりつぎの目的地へむかった。

『実記』によると、一八六五年（慶応元年）にアンベルス市の周囲に新砲台が八ヵ所もうけられたという。岩倉一行は、アンヴェルスにある新造の第四砲台（備砲一三〇門）[14]のひとつを見学したのである。近年、兵器が発達し、むかし備えた砲は旧式となり、新しい砲の装備とともにそのまわりの構造物も、あたらしくする必要が生じた。

そのため野にふかい堀を掘り、砲門のまわりにレンガをめぐらし堅牢にした。砲台に駐屯する兵士の数は、ふだんは四百名ほどだが、戦時には千五百名にもなるのである。

岩倉一行は、砲台見学をおえると、汽車で帰途についた。

ベディカー『ベルギーとオランダ』（一九一〇年）によると、ブラスカット村のちかくにある試射場は、規模の大きなもので、陸軍大臣の許可がないと一般人には見学をゆるされなかった、という。

『ル・ノール』紙（二・二四付）は、岩倉一行のブラスカット行について、『ル・プレキュルスール・ダンベール』紙（二・二一付）の記事を転載している。

> いまベルギーの主だった都市をおとずれている日本使節は、アンベルスを訪れるものとおもわれる。
> すでに昨日の朝、かれらはアンベルスにちょっとの間姿をみせた。日本使節は、ブリュッセルよりブラスカットにおもむくとき、国鉄の駅で足をとめ、州知事のあいさつをうけた。
> 汽車は王室の専用車であり、そこに王室の貴顕が何人かのっていた。
> 使節一行は、試射実験を見学するためにブラスカットの試射場におもむいた。かれらは四時半にアンベルスに戻ったが、すぐブリュッセルに

もどるために下車しなかった。

木戸によると、ホテルにもどったのは、午後六時ごろであったようだ。夕食後、木戸は

周布（公平？）
河野（光太郎？）
小倉（処平？）……明治三年、学制取調のためドイツ、イギリスに留学。のち西郷軍に投じ、戦死。
米田某

らの訪問をうけ、歓談した。

この日の寒さは、よほど堪えたものか、木戸は「今日寒気甚烈」（『日記』）としるしている。

二月二十一日。晴。

朝、岩倉一行は、ド・フローテ、ジョリー中佐らの案内で、ガラス工場や製鉄所を見学するためにリエージュにむかった。

この日は、前日とおなじように凍てつくように寒く、車窓には降りつもった雪がみられ、樹木の枝までが凍っているようだった。

『実記』は、つぎのようにいう。

朝八時ヨリ、例ノ如ク蒸気車ニ上リテ、東微南ニ走ル、此日暁寒ニテ、沿途ミナ積雪アリ、電信ノ線、叢樹ノ枝、ミナ氷凍リ雪撤シテ、玉ヲ結ヒ柱ヲ低レ、万木千草ミナ銀花［雪の形容］ヲ開キテ、車中ノ眺メ奇絶ナリ［ひじょうに変っている］

（中略）進行スル五十四英里ニテ、十時半ニ「リッチ」府［リエージュ］ノ駅ニ達ス、此辺ニ達スルコロヨリ、地上ニ斑雪［まだらの雪］ヲミス、蓋シ北海ノ風ニテ雪ヲ送リ、此ニ達セスシテ力絶ヘタルナリ

リエージュはベルギー東部に位置し、ブリュッセルの東南東九〇キロ、ムーズ川沿岸にそってある工業、河港の市である。

当時の人口は、約十万六千。ベルギーで四番目に大きい市である。

『実記』によると、リエージュの駅に着いた岩倉一行は、馬車に分乗しムーズ河に沿ってさかのぼり、大橋を渡り、さらに何キロか走って、

——「ソーラン村」ノ「ワルサル」会社ノ玻璢(はり)〔ガラスの古称〕製造場

に至ったという。

ソーラン村とは、こんにちのセラン（リエージュの南六キロ、いまは鉱工業都市）のことである。

「ワルサル会社……」とは、ヴァル・サン・ランベールのクリスタルガラス製造所の意である。

このガラス工場はイギリス人のジョン・コッケリル（一七九〇〜一八四〇）が設立したもので、コップ・酒ビン・薬ビン・飲食器などをつくっていた。このあと一行は、コッケリルの製鉄所をおとずれた。同社は、ガラス工場をつくったジョン・コッケリルが、一八一七年に創設したもので、一九二エーカの敷地に大小の建物が建っていた。

ここでつくられる品々は、車輪・車軸・車床・鉄板・レールなどであり、日に九千人ほどの従業員が工場に出入りしていた。工場内には蒸気を動力とする大ハンマー（大きいものは一五トンもある）があり、石炭の消費量は、日に一千トンにもおよんだ。石炭は構内にある炭坑から堀りだされ、坑夫は千五百人もいた。

岩倉一行は、製鉄所で昼食を供され、夜八時まえにブリュッセルのホテルにもどった。

『レコ・デュ・パルルマン』*L'Écho du Parlement* 紙（二・二三付）は、日本人一行のリエージュ訪問をつぎのように伝えている。

> 日本使節らは、きのう十時半に特別列車でリエージュに到着し、コッケリルの壮大な工場群を見学するために、セランに直行した。社長のサドワヌ氏[15]は、一行を待ちかまえており、かれらに食事を出すはずである。
>
> もし時間があれば、使節らはヴァル・サン・ランベールのクリスタルガラス製造所をおとずれることになっている。ギュマン駅にもどったらリエージュに寄らずに、すぐ特別列車でブリュッセルにもどるはずである。

同行者は、外務省の局長で駐日公使に就任するド・フローテ氏、ならびに参謀本部の中佐で男爵のジョリー氏である。州知事のルーズマンス氏[16]、および州書記らが、一行がリエージュに立ち寄ってくれたことに対する礼をのべるために、ギュマン駅[17]におもむいた。

二月二十二日。くもり。

この日、岩倉と木戸の各グループは、それぞれ別行動をとった。岩倉一行は、ベルギー南西部にある諸工場を、木戸一行はブリュッセル市内にある諸工場を巡覧した。『実記』は、つぎのようにいう。

朝九時ヨリ、例ノ如ク、蒸気車ニテ、西北方(ママ)ニ走リ、「フライン」府［不詳］ヲスキ、「クロセー」［クルセルの誤り］村駅ニ至リ、板玻瓈［板ガラス］ノ製作ヲミル

（中略）是ヨリ約二英里ヲ駆シテ、「フロピデンス」［プロヴィダンスの誤り］ノ製銕場ニ至ル、此処ヲ「マルシーネ」［マルシェンヌの誤り］邑(むら)ト云(いう)、人家ハ多ク矮屋(わいおく)［小さな家］ナリ、途上ニ石炭礦(こう)［炭坑］ヲミル、又銕鉱モアリト云

（中略）「カントスランバー」［シャトリノーの誤りか?］氏会社の薄板玻瓈製造所ニ至ル

一方、ブリュッセルの木戸一行の動向については、

首(はじめ)ニ鍍錫(ブリツキ)銕器ノ製造場［木戸のいう「食器の製作所」］[18]、ドロイエ、マッソン両氏の工場ニ至ル（中略）夫(それ)ヨリ寄木(よせぎ)細工場、タソンとワシェル両氏の工場[19]ニ至ル（中略）夫ヨリ針(はり)製作場［不詳］ニ至ル

視察をおえた岩倉一行は、同日の五時ごろブリュッセルのホテルにもどり、木戸一行は午後四時すぎに帰館している。

この日、岩倉大使に随行したのは、日本側から大久保・伊藤・山口のほか、通訳（日本人?）らであり、ベルギー側からはデ・フロ

ーテ、ジョリー中佐（男爵）・ダントン（男爵）・ユルセル（伯爵）らのほか、技師バビュ・デュ・マレスが同行した。後者が付き添ったのは、諸工場を案内し、説明するためであった。

岩倉一行が、ベルギー南西部にあるクルセル（シャルルロワの北北西）村の駅に到着したのは午前九時半ごろのことで、駅にはガラス工場の社長マルモルが馬車とともに一行を出迎えた（『ジュルナル・ド・シャルルロワ』紙、一一・二三付）。一行がおとずれた工場は、従業員が二五〇名ほどの規模のもので、かれらは構内で珪砂・炭酸ソーダ・石灰などを混ぜ、それを高温で熔解する方法、ガラスの研摩法などを見学した。

板ガラス一メートル四方の値段は、五〇フランほどであり、パリ製の鏡はクルセルのガラスを用い、それに水銀を塗り、装飾をほどこして売っているとのことであった。

ガラス工場の見学をおえた一行は、テオフィル・ジアンヌとジュール・ジアンヌ両氏に案内されて、馬車でマルシェンヌ（シャルルロワのちかくにある鉄鋼・機械の村）におもむいた。

一行はプロヴィダンスの従業員八百人ほどの、鉄工場のひとつをおとずれた。その工場でつくっていたものは、無蓋貨車や鉄道のレールなどである。

> 日本人は、圧延や槌打ちなどにひじょうに興味を示した（『ジュルナル・ド・シャルルロワ』紙、一一・二三付）

一行はテオフィル・ジアンヌ宅で昼食を供され、そのあとパリス・イサアク氏やクイエおよびシャトリノ両氏の工場をおとずれた、といった記事[20]がみられる。しかし、何の工場なのか、はっきりしない。おそらくガラス工場であったものか。

当日の日本人の風貌をスケッチした記事が、『ジュルナル・ド・シャルルロワ』*Journal de Charleroi* 紙（一一・二三付）に出ているので紹介しておこう。

使節らの顔つきに、とくにおどろかされることはない。だれもが日本人とはどのようなタイプの人種か知っているからである。日本人の表情は、ひじょうに動きに富んでいる。かれらの目は生き生きとし、輝いている。顔色についていえば、どちらかというと褐色である。けれど使節のひとりは、ひときわ黄色が目だっている（中略）。日本人は、洋装である。中には本物の紳士のように、モーニングコートを楽々と着こなしている者もいる。最年少のものは、フランス語や英語をすらすらと話す。

ブリュッセル市内の工場を数ヵ所見学におとずれた木戸一行の動向については、『ジュルナル・ド・リエージュ』紙（二・二四付）が、つぎのように報じている。

内務省の局長キント氏の案内をうけた日本使節は、土曜日にブリュッセルのアストロノミ街にある、タソンとワシェル両氏の工場をおとずれた。かれらはこの会社が王室のために製作している寄木細工やウィーンの博覧会用のさまざまな家具、ことにリエージュでつくっている武器のための細工物などに感心した。かれらは機械を用いてつくる細工物に大きな興味をしめした。

そのあと一行は、レケン街の車体業者ジョンズ氏の工場や鉄道のための用具をつくっているベルギー協会の工場などをおとずれた。

使節一行は、工場でつくられ、ロシアに輸出されるすばらしい車体について、社長のシャルル・エヴラール氏に賛辞を呈する機会をえた。

使節一行はこのあと、アンベルス街にあるドロイエ、マッソン両氏の工場をおとずれ、ほうろう製の世帯道具がつくられる過程を見学した。

同日の夕刻六時、王宮において晩さん会がひらかれ、そのあと劇場におもむき、ワグナーの歌劇「タンホイザー」を観た。一行がホテルにもどったのは、午前一時ごろであった。

二月二十三日。雪。

この日、ベルギー外務省において、岩倉大使は、条約改正問題や日本の近代化に対してベルギーが果せる貢献について、事務局長のランベルモン男爵と会談をおこなった。会談に出席したのは、岩倉や山口らであり、木戸・大久保・杉浦・田中・久米らは、ベルギー

に留学中の
周布公平……前出。
馬屋原二郎……もと長州藩士。明治三年（一八七〇）法学を研究するためにベルギーに留学。のち判事、地方裁判所長を歴任し、貴族院議員となる。

らの案内により、ワーテルローの古戦場見物にでかけた。

木戸一行は、鉛色の空のもと馬車でワーテルロー（ブリュッセルの南南東一六キロ）にむかった。ワーテルローまでの街道は、雪がふったあとであったのでぬかるんでおり、さんざんであった、と久米は『実記』に記している。

午前九時ヨリ馬車ニテ、西走（ママ）スル十二英里ニテ、「ウァトルロー（ワーテルロー）」村ニ至ル

一八一五年六月十八日、ナポレオンにひきいられたフランス軍（七万二千）は、イギリスやプロイセンその他の軍隊からなる連合軍（約一三万）と戦い、破れた。ワーテルロー周辺は、平坦な野であり、ところどころに樹林や農家がみられた。

木戸一行がおとずれた所は、
ウェリントン公の司令部……いまは「ワーテルロー博物館」となっている。
ライオン像の丘……高さ四五メートルの丘の頂上に、ライオン像がある。この丘は一八一八年につくられた。『実記』では、この丘を「高塚（たかつか）」と呼んでいる。
やナポレオンの司令部などである。

一行は地図をもったガイドにつれられて諸所をおとずれるのだが、その者の父（ワーテルローの戦いに加わったもとフランス騎兵、八十八歳）とも会った。

木戸は、「コロンネスホテルにて食事を認（したた）め四字帰寓」と日記にしるしている。「コロンネスホテル」[21]とは、ライオン像の丘のふもと

にある「ホテル・デ・コロンヌ」のことであろう。

二月二十四日。雪。

この日は、岩倉一行はベルギーをあとにし、つぎの訪問国オランダにむかった。途中、アンベルスで下車し、砲台や博物館などを見学したのち、首都ハーグを目ざした。

『実記』は、つぎのようにいう。

> 朝九時ヨリ「フロッセル（ブリュッセル）」府ヲ発ス、接待掛リミナ送リ来リ、二十七英里半ヲ走リテ、「アンウェルフ（アンベルス）」府ニ達シ、汽車ヨリ下（おり）レハ、府知事、及ヒ将士、駅マテ迎ヘ、馬車ニテ其砲台ニ至ル、

『実記』によると、当時のアンベルスの人口は、約一二万七千。アンベルスは、ベルギーで唯一の港町であり、この国の「物産ノ吐納（とのう）［出し入れ］する市」である、という。

市は、スケルデ川河口より八八キロ上流の右岸に位置し、十五世にはすでにヨーロッパ有数の貿易港のひとつであった。

『ジュルナル・ド・リエージュ』紙（二一・二六付）によると、岩倉一行はソヴィニエ氏（国鉄の視察官[22]）に案内されてアンベルスにむかい、当地には九時五〇分に着いた、とある。

一行は駅で、市長のド・ワール、州知事のペク、将軍デンスらの出迎えをうけた。

そのあと、

> 使節らは、五台の馬車にのると、海軍の施設、市の美術館[23]やおもな建造物などをおとずれた（『ジュルナル・ド・リエージュ』紙、二一・二五付）

という。一行は、建設中のドックをはじめ、砲台・取引所・市役所・美術館・教会などをざっと見てまわり、昼食をペク州知事宅でごちそうになったのち、午後三時四〇分発の汽車でアンベルスをあとにした。

接待係とは、このとき駅で別れた。アンベルスの『ヘット・ハンデルスブラット・ファン・アントウェルペン』*Het Handelsblad van Antwerpen* 紙の「市のニュース」は、つぎのように報じている。

> 日本使節の一行は、副官二名、通訳二名および王室の高官数名に案内され、王室の列車で今朝九時五〇分にアントウェルペンに到着した。
> 一行は駅で州知事のペク氏、市長のド・ワール氏、州の軍司令官らの出迎えをうけた。
> 日本人たちは洋服を着ていた。馬車にのると、港、ドック、美術館、取引所およびその他の公共の建物を見学におとずれた。（中略）きょうの午後、使節一行はオランダにむけて立つ。

木戸は、一行がアンベルスを出発したのは午後三時四十五分であった、といい、約一時間後には、オランダの国境ローゼンダールに着くと、もと駐日公使のポルスブルックや駐日領事のファン・デル・タックらに出迎えられた、とのべている。

*

岩倉使節団に随行した久米丈市（邦武、33歳）は、帰国後、膨大な量の記録や使節団の理事官たちから提出された報告書などを整理し、『実記』の執筆に着手するのだが、各国巡歴ちゅう久米に代わって見学先で質問し、それをメモしたのは畠山義成（幕末に薩摩藩留学生としてロンドン大学、ついでアメリカのラトガース・カレッジなどで法律や政治学をまなぶ）であった。

『実記』の構成をみると、はじめに訪れた国々を概観した説明（「…総説」）が来、ついで日記風な記事がくるが、そのところどころに個人的な感想や事物の説明が添えられている。

久米その人の「所感」こそ、かれの目を通して心に写った正直な印象、おもいであるだけに、研究上もっとも役立つ材料でもあるが、

かれは努めて客観的に描写しようとしている。

二　岩倉大使の私設記録係のベルギー観

岩倉は、後日、国民にも「目撃ノ実際」[24]をつたえるつもりで随員の、

久米邦武

杉浦弘蔵（のちの畠山義成）

らに命じ、記録をとらせたという。

このうち視察の現場において、関係者にくわしく問いただし、とくに熱心にメモをとったのは、語学にたん能な杉浦弘蔵であった。その杉浦の筆録と久米じしんの筆録とを突きあわせて、また理事官らの報告や諸書を参酌して成ったのが『実記』である。だから両人は、当世風にいえば、ルポライターでもあった。

岩倉使節団は、フランスからベルギーに入ったとき、まず樹林がひじょうに少ないことに気づき、ついで土地は平坦であることを知った。入国時、かれらはベルギーというのはどのような国なのか、まだ具体的イメージはできていなかったように思われる。多少なりともベルギーの輪郭を心に描くことができたのは、語学通だけであったに違いない。

日本は、ベルギーやオランダと同じように小国といった観点から、随員の中には、最初におとずれるベルギーに関心をよせる者がいたかも知れない。

『実記』は、ベルギーやオランダは、その国土の大きさと人口からいえば、筑紫（ちくし）［九州の称］ほどしかない、と記している。

岩倉使節団は、ベルギーをおとずれた当初、この国が新国家建設のモデルになるほど強いインパクトを受けはしなかった。しかし、ヨーロッパ巡行をおえて、改めてこの小国に注意をむけてみると、ベルギーがヨーロッパの中でも優等国であることを知るのである。

ベルギーは大国のあいだにはさまれているにもかかわらず、他国の保護や干渉をうけず、主体性をもち、独立を維持している。一八七〇年代の人口は、およそ五百九万人であり、ヨーロッパの独立国のなかでももっとも小さな国である。

経済力は、列強よりも上である。世界貿易における影響力も少なくない。ベルギー国民は勤勉であり、仲よく協力しあってくらしている。土地はけっして肥沃ではないし、湿地も多いが、この国には感服させられる（「白耳義国総説」）。

『実記』にみられる各国の総説に関する記述は、おもに地理書[25]によっており、ところどころ随員の見聞も差しはさんだらしい。しかし、われわれ読者には、どこまでが参考文献の記述であり、どこまでが個人的なそれなのか、その識別がむずかしい。いま、久米、杉浦ら現地報告者の摘要だけを記すと、つぎのようになる。

一　国にきまった王がいて、当人に法律のおおもと（憲法）を託さないと、国家の基礎はゆらいでしまう。

一　国に自主性をもった国民がいないと、国力はおとろえ、国体の維持はおぼつかない。ベルギーの憲法は、国民の自主性を涵養するために定められたものである。この国が独立を達成するまで、ベルギー人の生産性はひくく、農作物をつくるだけで、産業といえば陶磁器だけであった。

最近では、国民のほぼ半数が、農業や製造業に日々はげんでいる。ベルギーの立憲君主制は、他の王国のものと異なっており、国民の自主性にいたっては共和国よりもまさっている。

一　国家の盛衰は、政治によるのではなく、国民の一致団結、協力関係に左右されるところが大きい。だから政府は、国民を反映したものなのである。

一　鉄道の建設は盛んであり、ヨーロッパ各国よりも盛大である。

一　ベルギーの土地は、粘土や砂が多く、沃土はすくないのであるが、国民は農耕についての勉強をおこたらない。畑は相つらなり、じぶんの畑と他人の畑を区分するために、細長いくぼみをつくったり、広葉樹を植えたりしている。牧場よりも畑のほうが多い。

畑に畝（しきり）をつくる点では、日本と似ている。ただ日本と異なるのは、水田がないことである。農家は土壁でできており、かわらぶきの家もある。壁はひくく、屋根は大きい。日本の農村風景と似たものがある。

一　ベルギー国民の風習は、フランス人の風習と同じである。

一　最近、ベルギーでは興業が盛んなようであり、イギリスを思いださせる。そのため村も町も繁盛している。

一　ベルギーには鉄や石炭が豊富にあり、ことに製鉄はヨーロッパでいちばん盛んである。炭鉱はこの国の産業の源泉である。石炭の質は、イギリス炭をのぞくと、ヨーロッパでもっとも質が高い。

一　もっとも盛んな産業は、製鉄であり、ついで紡績（綿花・亜麻）やガラス製造などである。

一　ブリュッセ市内に見られる大小の商店は、お互いぴったりとくっついている。街路はせまく、不規則であるが、すべて石を敷きつめてあるので、歩行や車行にとってつごうがよい。市内には、白い石や白壁の建物が多く、至るところで白くかがやいている。夜ともなれば、ガス灯が輝き、パリにいるような気がする。ブリュッセルが「小パリ」と呼ばれるゆえんである。

一　ベルギーで唯一の貿易港アンベルスは、北海第一の良港である。市内にあるドック・砲台・取引所・市庁舎など、どれひとつとっても、広壮なのに驚かされる。

『実記』をじっさい執筆した久米邦武のルポルタージュの中で等閑視できないのは、アンベルスの近郊ブラスカット村のちかくにある試射場で野砲の実射を見学しおえたとき、かれの心に浮んだいくつかの疑問である。

ベルギー人は小国の民ではあるが、力をつくしてよく戦う、という。ベルギーのまわりには大きな、国力の強い国がひかえているので、守勢的態度をとらざるをえない。

にもかかわらず、なぜこの小国が、独立や中立を維持できるのか。

久米がその答えとして考えたのは、「必ズヤ其力能ク四境［四方の国境］ニ溢ルヽノ鋭［つよい軍隊］ナクンバ、安ンゾ［どうして］能ク中立ヲ守ルヲ得ン」[26]ということであった。

つまり国家有事のとき、国境に強力な軍隊を送りだすだけの甲斐性がないと、中立なぞ保てるものではない、という意である。

しかし、田中彰氏によると、この引用文は、べつな解釈もできるという。[27]「四境ニ溢ルヽノ鋭」とは、生産力を基礎にした国民の総力の意とも解せられるという。

すなわち、ベルギー国民がお互い心をはげまし、一つになれば、外敵をはねのけ、中立を保てるというのであろう。換言すれば、

「それは自立・独立の気概を含んだトータルな力とみなければならない」という。

また岩倉一行がベルギーからオランダにむかう途中、車窓にみた広葉樹と針葉樹の林の交錯に、土地所有の問題をみている。

国民は私有地に早く利益を生んでくれる広葉樹をうえ、それが成長するとすぐ伐採し金に変えてしまう。また農業と牧畜業の利益のために山林を開墾してしまう。だから成長までながい歳月を要する針葉樹の林はひじょう少なく、見かけても官有地にかぎられる。それゆえ、「山林樹木ノ制［植林法］ニ於テハ、往時ノ自由ヲ廃シテ、束縛抑制スルノ政度［きまり］ヲ立ルニ至リシモ、畢竟ハ衆庶［多くのひと］ノタメニ、永利ヲ図レル所ナリ」[28]という。

山林保護や国民の福利のためにも、きちんと法律をつくることが肝要であるが、「全国ノ利益ヲ保続シ、人民ノ自由ヲ完全ニスルニ於テハ、政府ノ配慮、益周密［あまねくゆきわたる］ナラサルベカラズ」[29]。

たしかにベルギーには、自主独立や自由のふんいきがみなぎっている。しかし、国民の自由や気ままさを野放図にみとめていたのでは、らちがあかない。だから政府が自由に足かせをかけることは、国民の自由を完成させることになる。

このような論理は、「使節団帰国後の明治政府のあり方を考えるうえで重要である」という。[30]

三　ベルギー側は、日本および岩倉大使一行をどのように見ていたのか

ベルギーの報道機関（新聞）が、岩倉ら日本使節団のことを記事にしようとするとき、日本および日本人について欧文で書かれた諸書に目を通したこととおもわれるし、外交筋からも最近の日本事情についての情報を仕入れていたものと想像される。

ほんの五、六年ほど前までの日本のイメージは、世界に対して門戸をとざした、すばらしい漆器と磁器の輸出国、〝幻想的な国〟のそれであった。しかし、革命を経てからの日本のイメージは、専制政治を廃した新国家として魅力に富んだ、詩的な国に変わった。

ベルギー国民は、報道記事によって、日本がおどろくべき意志とエネルギーをもって、改革にまい進していることを知るのである。しかし、大騒ぎをあてこむ記者からすれば、岩倉一行がチョンマゲを結び、和服を着、腰に大小を差しておとずれて欲しかったようだ。誇張された、きわもの的記事として、「日本人一行は洋服をじょうずに着こなすために、じぶんたちの頭を飾っていた弁髪を犠牲

にした」(『ジュルナル・ド・シャルルロワ』二・一八付)紙、といったものまであった。

じっさいベルギーにやって来た一行をみたときの印象は、〝勇猛な連中〟といったうわさとはちがって、おとなしい紳士たちであった。「日本人はメモをたくさん取り、口数も少なく、あいさつもあまりしなかった」という。

岩倉一行を離れたところから見ると、みな若々しくみえたが、近くでみると、「疲れた表情をし、しわの刻まれた顔」(『ジュルナル・ダンヴェール』*Journal d'Anvers* 紙、二・二三付)をしていた、という。おそらく長期にわたる旅ゆえに、疲労の色をかくせなかったものであろう。

岩倉一行については、堅い記事ばかりが報道されたわけではない。中には艶事にちかい記事までが報道されている。しかし、真偽のほどは定かでない。

軍事学をまなぶためにベルギー陸軍に派遣された若い日本の留学生(氏名不詳)が、帰国にさいして、恋人にじぶんの髪のふさを贈った、という話である。

その留学生(下士官待遇)は、とても頭がよく、仲間の兵や上官からも愛されていた。かれはブリュッセルである娘と恋仲になった。その娘は相手の男と再会できないとおもい、かたみに髪を切ってくれ、といった。男はためらわずじぶんの髪(弁髪)を切り、それを娘にあたえた。男は帰国すると、砲兵将校となった。ベルギー娘のほうは、かたみにもらった髪を大切にもっている、という(『ジョルナル・ド・シャルルロワ』紙、二・一八付)。

四　岩倉大使に対するベルギー政府の反応

一国を代表する使節団がやってくるとなれば、どの国も相応の礼をつくすのがふつうであり、ベルギー政府もこの点でぬかりはなかったようだ。岩倉使節団にみせる諸施設について、外務省はあらかじめ関係省庁に見学先のリストをつくらせていた(ベルギー外務省文書)。

ベルギー側は、使節団の訪問目的が、

一　国王への国書奉呈
二　現地視察
三　条約改正の予備交渉

であることを、駐日ベルギー公使館や諸外国の機関（外務省）などから入る情報によって知っていた。

外国の機関といえば、たとえばイギリス外務省は、それまでに行なった岩倉との会談のもようを文面にして、ベルギー外務省につたえている。

イギリス政府は、これまでの岩倉大使とのことばのやり取りから、日本側全権に不満こそおぼえても、けっして会談に満足したわけではなかった。イギリス側にとっての不満とは、

一　使節本来の目的について、説明が足りない
一　日本政府の考えや願望についての説明不足

などであった。

イギリス政府は、日本との友好関係の継続上、日本に早く秩序と正義が根付くことを望んでいた。外相グランヴィルは、条約改正の対日交渉において、駐日公使パークスの判断に全幅の信頼をおき、かれにこの問題の処理を一任した感がある。(31)

日本とベルギーとの会談(32)は、明治六年（一八七三）二月二十三日、ブリュッセルの外務省において一回のみ行なわれた。

日本側からは、

（正使）特命全権大使……岩倉具視（ともみ）
（副使）外務少輔……山口尚芳（なおよし）
（一等書記官）外務少丞……田辺太一（やすかず）
（二等書記官）？……栗本貞次郎

ら四名が出席した。通訳は栗本が行なった。

ベルギー側からは、

特命全権大使（外務省の事務局長）……ランベルモン男爵

大蔵大臣……ジュレー・マロー（マルー）

駐日ベルギー公使……シャルル・ド・フローテ

ら三名が出席した。

外務大臣は健康がすぐれないために欠席し、ランベルモン男爵がその代役となった。

この日の会談は、ほとんど岩倉とランベルモンとの間で行なわれ、他の者は終始黙々として双方の議論を聞いていたようである。

まずランベルモンはあいさつをすると、岩倉の信任状をよみ、ついで日本とベルギー間に存在する諸関係について語り、さらに日本の現状について語ってもらうことを提案した。

以下、会談はランベルモンに先導されたかたちで進んだ。

岩倉は、使命の趣（おもむき）や、封建制が廃止され、天皇を中心とする体制にもどったことを伝えた。これに対して、ランベルモンは日本において行なわれたいくつかの改革には感心した、といい、つぎのように語った。

――当方が、この会談の目的のひとつと見ているのは、閣下にわがベルギーについて意見をのべて欲しいということです。

ランベルモンは、岩倉の本意（条約改正交渉）に一顧をも与えないかのように、まくし立て、話を進めた。

――わが国は、中立なのです。つまりわが国は、他国間の戦争にはいささかも加わらないということです。わが国には軍艦がありません。しかし、自衛のための軍隊が一万人と城砦があります。

閣下と他の使節団の方々は、わが国の産業のいくつかをご覧になりました。われわれは友邦にとって役に立つものをもっておりますし、そのためいっそう友邦に援助の手を差しのべたいとおもっております。結果として生じる危険をも辞さぬつもりです。

これに対して岩倉は、

――わが国に対するご好意には感謝いたします。わが国も貴国とおなじように工業国になりたいとおもっております。そのためにも

ヨーロッパ列強の援助が必要なのです。すでにいくつかの条約が期限切れになり、他の条約の期限も間じかに迫っております。われわれが帰国したら、他の列強との友情の絆(きずな)を強固なものとするために、再び条約がむすばれることでしょう。

もし閣下がよき援助をするのが道とお考えなら、いつでも喜んで閣下のご意見をお聴きいたします。

ランベルモンは、このあと「条約について語るまえに」と前置きしながら、行政・財政・公共事業についての概念を、日本とベルギーとのあいだで打ち立てるべき観点から手みじかに語った。

ランベルモンが語る話は、じっさいベルギーの国勢全般にわたるものであった。

かれの口ぶりは、行政、教育、軍事、鉄道、貿易、工業など、日本が近代化を進めるうえで必要なものはすべて提供できる、といわんばかりのものであった。

それに対して岩倉は、興味をしめすにとどまった。

ついでランベルマンは、日本のキリスト教徒が不当にあつかわれている事実（明治2、浦上のキリシタン弾圧）に遺憾の意を表すると、岩倉は、

――日本政府も閣下とおなじ見方をとっております。キリスト教に改宗した日本人に対しては、すでに厳しさがいっそう緩和されており、われわれとしてもこの状態がもっと改善され、他の列強とおなじように宗教の自由に到達することを望んでおります。

と語った。

ランベルマンは、岩倉の口からもれたこの言葉に満足の意を表し、さらに日本が自由政策を採ることをのぞんだ。

岩倉にとって、最大の関心事は条約改正の件であったが、この問題について、ランベルマンは新公使に訓令をあたえ、日本政府と交渉に入り、新条約をむすべるようにする、といった。

会談を終えるにあたって、ランベルマンはベルギーと日本とのきずなが、これからも途切れないことを望みます、と述べると、岩倉は閣下とおなじ意見です、と答えた。

なお、日本側の資料（岩倉大使ト白(ベルギー)国蔵相トノ対話書）では、条約改正交渉が進展しなかったのは、使節が「専決の権」（一人でか

ってに決める権利）をもたなかったとしている。そのためベルギー側は、交渉に入ってもしょうがない、と判断し、新公使に委細をつたえておくので、日本において交渉されるがよい[33]、といったとある。

ベルギー側の資料には、岩倉大使の「専決の権」にふれたことばは見られず、日本側資料とのずれがある。

ベルギーが岩倉使節団の来訪に関心をもち、歓迎の意を表したのは、単に儀礼上の理由ばかりではなく、ひとつにはこれまで使節団がおとずれた国々への対抗心[34]からであった。人間の行動のうらには、つねに動機というものが存在するが、日本人一行を好意をもって迎えたのは、経済的理由[35]によるところが大きかった。

すなわち、ベルギーは海外に市場がほしかった。日本に自国の製品を売りたかった[36]。新国家日本に着目し、この国をベルギーが生みだす機器や技術、とりわけ機関車や車両やレールなどを売りさばくはけ口としたかったのである。

先に引いた「日本の使節たちを歓迎することをひじょうに重視している」（『ガゼット・ド・モンス』紙、二・一八付）といった記事は、裏をかえすと日本市場への一層の参入を得たい願望にほかならないのである。

岩倉とランベルモンとの会談において、条約改正問題について踏みこんだ議論が行なわれず、尻切れに終ったのは、ベルギー側にこの問題にあまり関心がなく、むしろ商業的関心のほうが強かったためである。そのため日本側の外交的関心とベルギーの商業的関心がかみ合わず、交渉は先おくりとなった。

あとがき

岩倉ら新国家の指導者たちの目に写ったベルギーとはどのようなものであったのか。またこの小国についてかれらはどのような印象をもち、日本の改革になにか役立つものを見いだしたのであろうか。

わずか八日間の駆け足的な視察旅行では、ベルギーについてじゅうぶん知ることはできないし、その理解にしても皮相的で半解をまぬがれえない。おそらく岩倉一行のベルギー観といったものは、一言でいえば、施政の行き届いた、産業立国のイメージではなかろうか。

視察の成果は、すぐ国政に反影されることはまずないが、日本は明治憲法（大日本帝国憲法）を制定するにさいして、イギリスやフランスやプロシアの法律を翻訳し、研究材料としたが、明治十年代から二十年代にかけて、ベルギーの法律書や憲法を邦訳し（明治8）、参考にしたのである。(37)

また日本銀行は、ベルギー国立銀行をモデルとしたものだという。ベルギーは、国立銀行を創設するとき、各国の中央銀行制度を研究し、完全を期したため、(38)かえってイギリスやフランスの中央銀行よりもすぐれている、ということを知った。要路のひとびとはこれを模範として、明治十五年（一八八二）に「日本銀行」を創設した。

またベルギーは、小国ながら軍備や国防に力をそそいでいるため、明治十年代に日本の陸軍将校らがたびたびこの国をおとずれているし、岩倉使節団と入れ代わりに司法省の視察団がベルギーに入国している。

この視察団は、

河野敏鎌（一八四四～九五、団長格）……もと土佐藩士。司法少丞兼権大検事。佐賀の乱で江藤新平らを審理。のち伊藤内閣の文相。子爵。

岸良兼養……司法少丞兼権大検事。

鶴田　皓……明法助。

川路利良（一八三六～七〇）……もと薩摩藩士。警保助兼大警視。警察制度の基礎をつくる。

沼間守一（一八四三～九〇）……もと幕臣。司法省七等出仕。のち東京府議長。

名村泰蔵（一八四〇～一九〇七）……蘭通詞の名村家の嗣子となり、のちフランス語を学ぶ。横須賀造船所の建築掛をへて、維新後司法省に出仕。後年、大審院検事長となる。

益田克徳……明法大属。

井上　毅（一八四四～九五）……同　右。もと熊本藩士。のち枢密顧問官。子爵。

ら八名(39)からなり、明治五年八月十二日（一八七二・九・一四）フランス郵船で横浜を出帆し、同年九月二十六日（一〇・二八）マルセ

ーユに到着した。

この視察団のなかに川路利良の名がみられるが、同人の渡欧のおもな目的は、日本の警察制度の近代化に資するために、ヨーロッパのポリス制度を調査研究することにあった。

川路は、無口なひとであったらしい。とくに道楽はなく、詩作と剣をまなぶことを唯一のたのしみとした。[40] 一行がマルセーユに上陸し、パリにむかうとき、この謹厳実直な人間は、ただいちど国恥まがいのことをしでかした。

車中、にわかに便意をもよおし、堪えきれなくなった。ついに日本の新聞紙を床の上に敷くと、毛布をかぶり、他人の目からみえないようにし、その上に黄色の大きな固まりを落したのである。

ついでそのふかしたての饅頭(まんじゅう)を新聞でつつむと、汽車の窓から外にすててしまった。そしてなにくわぬ顔をしていた。それだけなら大して問題とならなかったであろうが、パリに着いた翌日、そのことが新聞に出てしまった。

——昨日、汽車の窓から、大便の包みをほうり投げた者がいる。その者はきっと日本人にちがいない。なぜなら、それを包んだ新聞紙は、横文字ではなく、日本文字であったから。

これを聞いた川路は、ため息をついていった。

——日本の文字は不便ぢゃね![41]

一行は明治六年（一八七三）三月初旬までパリに滞在し、この間に警察や刑務所を視察したり、ボアソナードから法律の講義もきいたらしい。[42]

川路がベルギー入りをしたのは、三月に入ってからであるらしく、同国で約一ヵ月ほど視察や調査に時をおくった。このときの川路の視察記録は、「泰西見聞録」（「白耳義」の部分は一一八枚）にくわしいが、かれのみたベルギーの警察制度は、「市民への行政サービスと、市民と警察との強い信頼関係に特色をもつ」[43]ものであった。

川路は外国語ができなかったから、通訳の名村泰蔵が日本語に訳すことばを筆録したものとおもわれる。ベルギー滞在ちゅう、かれは主にブリュッセルにいたものか。ときに地方の諸施設へも出かけたものと思われるが、ルーヴェン（ベルギー中部、ブリュッセルの

東北東二七キロ）におもむいている。

しかし、いつこの古い市をおとずれたものか、はっきりしない。

○十二時二十分檻獄［町にある〝独居監房〟のことか］見学終り此ルバン（ルーヴェン）ノホテルドビール（オテル・ド・ヴィル）［市役所――十五世紀に建てられた後期ゴシック様式の建物］見学トシテ差越ス

此ルバン上古［大昔］ベルギーノ都ニテ此ホテルドビールハ八百年（ママ）以前ニ拵ヘタルモノ［建造した］物ノ由其家ニ彫スル人物今ノ姿ニアラス八百年前ノ色々ノ姿アリト云フ欧州ハ上古ヨリ此広大ノ家居［建物の意か］ヲ起セシモノ歟吾国ニ見サルトコロ乞食体ノ物貰スルモノハ七日ノ入牢ニテ三ヶ月開墾地ノコロニイ［植民地］ト云フ所ニ遣ス法ナリト云フ(44)

注・（ ）と［ ］内は、引用者による。

川路は約一ヵ年にもおよぶヨーロッパ視察をおえ帰国すると、警察制度に関する建議書を提出し、それにもとづいて内務省と東京警視庁が設立された（明治6・11～同7・1）(45)。

建議書のなかで、警察のあるべき姿とは、「良民を保護」することである、といい(46)、市民への行政的奉仕をうたった。が、ベルギーの警察制度は、川路が理想とするものを具現したものとおもわれた。

このようにわが国が、ベルギーから学んだものはけっして少なくないのである。

注

（1）磯見辰典・黒沢文貴・桜井良樹共著『日本・ベルギー関係史』（白水社、平成元年九月）、一七頁。同書によると、「イエズス会宣教師テオドーズ・マンテル（Theodose Mantels）の名前は、テオドロ・マンテルとなっている。が、誤植であろう。

(2) L'abbé Profillet: *Le Martyrolge de l'Église du Japon 1549–1649*, tome II Les vénérables, Téqui, Libraire–Éditeur, Paris, 1897, 111頁。なお，同書にあらわれる宣教師マンテルに関する記事は，つぎのようなものである。資料として，つぎにかかげておく。

[資料1] ★★★

MANTELÈS, Théodose, Prêtre de la Compagnie de Jésus, Flamand, mort pour la foi, à Malacca, en 1593. Il y avait trois ans qu'il s'était refugié dans cette ville, venant du Japon où le prince de Firando l'avait fait empoisonner, pour s'en débarraser sans bruit. Depuis ce moment, le vénérable Père était tombé dans un état de langueur accompagnée des douleurs les plus aiguës. [p. 320〜321]

マンテルが毒をもられたというヒピンードは，シャルルボワ (le R. P. de Charlevoix) の *Histoire de l'établissement, des progres et de la décadence du Christianisme dans l'empire du Japon,* Tome II, Pierre le Boucher, Rouen, M. DCC. XV. にもあらわれる。

注 (1) では，マンテルが出ている個所を vol. 1er としているが，1巻目には同人の記事は見当らないので，11巻の誤りであろう。

[資料2]

Il s'en falloir bien que les affaires du Christianisme allassent aussi-bien dans le Firando que dans les Etats du Roy d'Arima, le Roy de Firando assez porté de lui–même à persécuter les Chrétiens, & persuadé qu'il ne désobligeroit pas l'Empereur de les maltraiter plus que jamais, étóit bien résolu de les pousser à tout outrance.

Il n'osoit cependant pas chasser les Missionaires, de crainte que les Portugais n'abandonnassent ses Ports, d'ailleurs le Prince Jérôme, fils du feu Prince Antoine, dans les terres de qui ils étoient, n'eût pas souffert qu'on usât de violence à leur égard: il jugea qu'il valoit mieux s'en défaire sans bruit, & il fit empoisonner deux Jésuites qui se trouvérent (ママ) seuls dans le Royaume, l'un mourut sur le champ, il étoit Castillan de Médina del Campo, & se nommoit le Père François Carrion, l'autre, appellé le Pére (ママ) Théodose Martel, ou Manteles, étoit de Liége (ママ), il tomba dans une langueur accompagnée des douleurs les plus aiguës, dont il mourut à Malaca, après trois ans de souffrances. [p.193〜194]

なお、一九三頁の余白に "Le Roy de Firando fait empoisonner six Missionnaires." とある。

(3) 『久米博士九十年回顧録　下巻』(早稲田大学出版部、昭和九年十月)、五三四頁。

(4) Elisée Reclus: *Nouvelle Géographie Universelle*, la terre et les hommes, IV L'Europe du Nord-Ouest (Belgique, Hollande, iles Britanniques), Librairie Hachette et Cie, 1879, 一一一頁。

(5) 当時の駅舎は、モンスにはもうみられない。いまの駅はモダンな大きな建物である。

(6) 大久保利謙編『岩倉使節の研究』(宗高書房、昭和五十一年十二月)、九七頁。

(7) 『岩倉公実記　下巻』(財団法人岩倉公旧蹟保存会、明治三十九年九月)、一〇三一～一〇三三頁。

(8) 『木戸孝允日記　第二』(木戸侯爵家蔵版、昭和八年三月)、三一八頁。

(9) Karl Baedeker: *Belgium and Holland* including the Grand-Duchy of Luxembourg, Handbook for travellers, karl Baedeker, Publisher, Leipzig 1910, 五五頁。

(10) 『コンサイス地名辞典　外国編』(三省堂、昭和五十二年七月)、九四五頁。

(11) セルクラース伯は、一九〇九年八月二十八日、ジャン・フランソワ・ヒスランの子としてブリュッセルに生まれ、ギムナジウムをへて、ルーヴェン大学で哲学・文学・法学などを学んだ。一八八〇年五月二十五日ゲントで死去。
同人については、Koninklijke Vlaamse Academiën van België, "*National Biografisch Woordenboek* 3", Paleis der Academiën, Brussel, 1968, 八七二～八七五頁を参照。

(12) フェリックス・ド・ヘンプティンヌ(生没年未詳)が、一八一五年にゲントに創設した綿織工場。

(13) ジャン・ジュール・リンデン(一八一七～九八)は、ベルギーの植物学者。園芸家 Guido Deseyn に De Industrialisatie van de Gentse tuinbouw といった論文があり、この中に花園(植物園)の沿革についての説明があり、またさし絵が添えてある。

(14) 注(8)の三二〇頁。

(15) ウージェーヌ・サドワヌは、一八二〇年にアート(Ath, ブリュッセルの南西五〇キロの町)で生まれ、のちベルギーの士官学校やフランスの海軍造船学校(ブレスト)にまなんだ。一八六五年、パストールのあとをついでコッケリル社の社長となった。同人については、*110me Anniversaire de la fondation des usines Cockerill. 1817～1927, 1928*, p. 68-71 を参照。

(16) シャルル・ジョゼフ・パスカル・ド・ルーズマンスは、一八〇八年四月二十日ティーネン（ブリュッセルの東四五キロ）に生まれ、一八八二年三月二十六日リエージュで亡くなり、ナミュールのロンシャンに葬られた。弁護士を経て政界に進入し、一八六三年九月から一八八二年三月までリエージュ州の州知事をつとめた。
同人については、Mémorial de la Province de Liège, 1836~1986, Liège, Masso, 1987, p.99-100 を参照。

(17) Station des Guillemains のこと。

(18) 注（8）の三二頁。

(19) *Journal de Gand* 紙（一・一二付）に、——L'ambassade japonaise, accompagnée de M. Kindt, inspecteur général de l'industrie, a visité hier *les ateliers de carrosserie de MM. Jones frères* à Bruxelles. とある。

(20) *Jounal de Charleroi* 紙（一・一三付）を参照。

(21) 注（9）の一四九頁。

(22) *L'Écho du Parlement* 紙（一・二五付）を参照。

(23) アンベルス市内には、代表的な美術館がいくつかあるが、一行が訪れた美術館については明らかでない。おそらくアンベルス王立美術館、プランティン・モレトゥス美術館、ルーベンス記念館などのいずれかを見学したということであろう。

(24) 久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使　米欧回覧実記 (一)』（岩波書店、昭和五十八年五月）、一三頁。

(25) 同右、一五頁。

(26) 注（24）の『実記』（三）』、一九〇頁。

(27) 田中彰『脱亜』の明治維新——岩倉使節団を追う旅から』（日本放送出版協会、昭和五十九年三月）、一〇七頁。

(28) 注（24）の二一六~二一七頁。

(29) 注（24）の二一七頁。

(30) 注（27）の一〇八頁。

(31) Earl Granville to Sir H. Parkes, Foreign Office, Jan. 13, 1873.（ベルギー外務省文書館蔵）

(32) このときの日本側の記録として、「白国（ベルギー）ニテ岩倉大使ト白国蔵相トノ対話書」（『大日本外交文書　第六巻』所収）があり、ベルギー側の記

録としては、Memorandum d'une conférence officielle qui a eu lieu le 23 février 1873, au Ministère des Affaires étrangères à Bruxelles, entre le Baron Lambermont, Envoyé extraordinaire et Ministre plénipotentiare, Secrétaire Genéral de ce Département (……) et S. Exc. Shiouni Tomomi Iwakura, Ambassadeur extraordinaire de S.M.l'Empereur du Japon. がある（ベルギー外務省文書館蔵）。

後者は、『日本・ベルギー関係史』（八六～九六頁）に邦訳がのっている。

(33) 『大日本外交文書　第六巻』（日本国際協会、昭和十四年六月）、九七頁。

(34) Prof. Willy van de Walle: *"Belgium 17-24 February 1873"* (The Iwakura Mission in America and Europe-A New Assessment, Meiji Japan Series 6　所収）の九〇頁を参照。

(35) 同右。

(36) 注（34）の九一頁を参照。

(37) 注（1）の一六二～一六九頁を参照。

(38) 注（1）の一五九頁を参照。

(39) 高橋雄豺「川路大警視の「泰西見聞誌」(一)（『警察研究』第四十巻・第五号所収）を参照。

(40) 鈴木廬堂『大警視川路利良君伝　全』（東陽堂、大正元年十二月）、二八三～二八四頁。

(41) 同右、二八八～二八九頁。

(42) 注（39）を参照。

(43) 注（1）の一一一頁。

(44) 「川路大警視の「泰西見聞誌」(六)（『警察研究』第四十巻・第十号所収）より引用。

(45) 注（43）におなじ。

(46) 同右。

本稿を草するにさいして、国内外の諸機関のお世話になった。国内では早稲田大学中央図書館、東京大学史料編纂所、上智大学附属図書館

（キリシタン文庫）をはじめ、ブリュッセルのベルギー外務省文書館、王立図書館、ゲントおよびリエージュの公文書館などの資料を利用させていただいた。個人的には取材にさいして、実業家の勝山光郎氏、ルーヴェン大学のアリアン・ファン・デル・ウェルフ（研究員）、インゲボルグ・フェルプランケ女史（講師）、ウィリー・ファン・ド・ワレ教授らのご高配にあずかった。記して謝意を表します。

なお、本稿は平成十一年度法政大学特別研究助成金の成果報告の一部である。

ベルギーにおける岩倉使節団の旅程表

年月日	天候	事項
（一八七三） 明治6・2・17	晴	午後三時四十五分、岩倉大使一行はパリの「北駅」を発し、ベルギーにむかう。夕方、フランス国境の村ケヴィに到着。同地でベルギー側の接待係の出迎えをうける。午後九時半、モンス駅に到着。ここでエイノー州知事、モンス市長らの歓迎の辞をうける。 そのあとブリュッセルにむかう。午後十一時二十分ごろ、ブリュッセルの「ミディ駅」に到着。ただちに馬車で「ベルビュ・ホテル」（「オテル・ベルビュ・エ・ド・フランドル」ロワイヤル広場七番地）におもむく。この日より、ここを旅宿とする。
2・18	晴。曇天	午後一時半、岩倉大使らは王室差しまわしの馬車にのり、王宮にいたり、国王レオポルド二世に謁見。同夜、王宮において歓迎晩さん会と舞踏会が催される。
2・19	くもり	接待係シャルル・デ・フローテ、フェルディナン・ジョリーらの案内でゲントをおとずれ、ヘンプティンヌ氏の綿花紡績工場、ジャン・リンデン氏の花園（植物園）、ラ・リス氏の亜麻製糸工場などを見学。 午後四時ごろゲントを出発し、五時ごろ帰館。同夜、王宮で夜会（ソワレ）が催される。
2・20	くもり。みぞれ降る	午前九時二十分ごろ、接待係の案内でブリュッセルを発し、アンベルス郊外の村ブラスカットにむかう。野砲の実射や砲台を見学する。午後六時ごろ、帰館。
2・21	晴	午前八時ごろ、接待係の案内でリエージュにむかう。リエージュには午前十時半ごろ到着。馬車でセラン（リエージュの南六キロ）におもむき、ヴァル・サン・ランベールのクリスタルガラス製造所、ジョン・コッケリルの製鉄所などを見学。 使節一行は二派にわかれ、視察におもむく。岩倉のグループは、クルセル村、マルシェンヌ村（ともにベルギー南西部のシャルルロワの近郊）などをおとずれる。岩倉一行は、クルセル村のガラス工場を見学した
2・22	くもり	

2・23	雪
2・24	雪

のち、馬車でマルシェンヌ村におもむき、プロヴィダンスの鉄工場を見学。午後五時ごろ帰館。

一方、木戸のグループは、ブリュッセル市内の諸工場を見学。はじめドロイエとマッソン両氏の食器製作場（アンヴェルス街）をおとずれ、そのあとタソンとワシェル両氏の寄木細工工場（アストロノミー街）、ジョンズ氏の車体工場（レケン街）、針工場（不詳）などをおとずれ、午後四時すぎ帰館。

この日、岩倉大使はベルギー外務省において、ランベルモン（事務局長）、マロー大蔵大臣、ド・フローテ駐日公使らと会談。

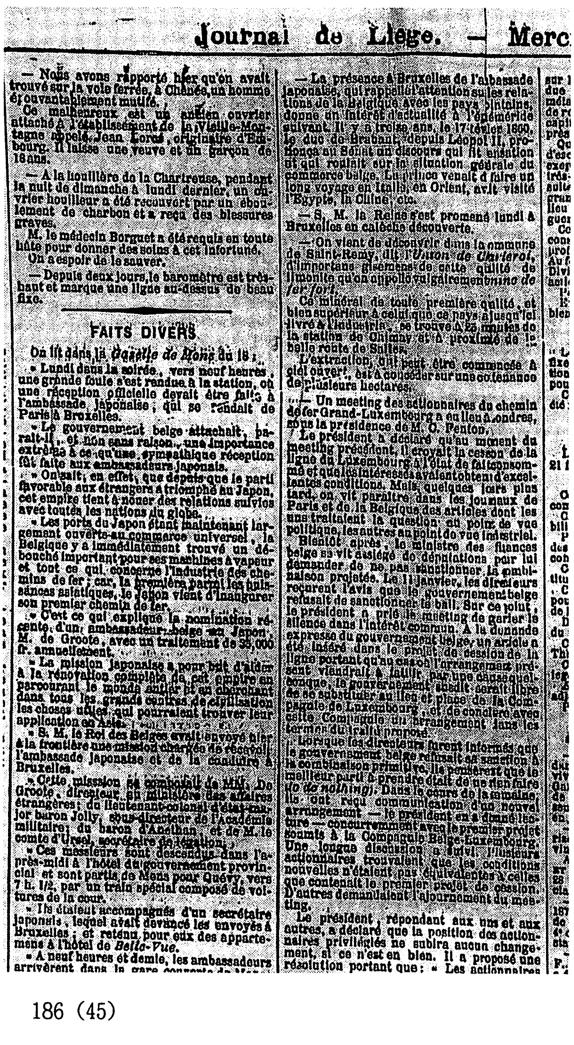
木戸一行は、午前九時ごろ馬車でワーテルローの古戦場見学におもむく。

岩倉大使一行は、午前九時ごろブリュッセルを発し、オランダにむかう。途中、アンベルスで下車、ドック・砲台・美術館などを見学したのち、ベク州知事宅で昼食。午後三時四十五分、アンヴェルスを出発。約一時間後、ローゼンダール（国境の村）に到着、ここでオランダ側の接待係の出迎えをうける。

大警視・川路利良
明治５年パリで撮影した写真（『大警視川路利良君伝 全』より）

権少外史・久米邦武
（岩倉の私設秘書）

全権大使・岩倉具視
（東京大学史料編纂所蔵）



Journal de Liège. — Merc

— Nous avons rapporté hier qu'on avait trouvé sur la voie ferrée, à Chênée, un homme épouvantablement mutilé.

Ce malheureux est un ancien ouvrier attaché à l'établissement de la Vieille-Montagne appelé Jean Loros, originaire d'Embourg. Il laisse une veuve et un garçon de 18 ans.

— A la houillère de la Chartreuse, pendant la nuit de dimanche à lundi dernier, un ouvrier houilleur a été recouvert par un éboulement de charbon et a reçu des blessures graves.

M. le médecin Borguet a été requis en toute hâte pour donner des soins à cet infortuné.

On a espoir de le sauver.

— Depuis deux jours, le baromètre est très-haut et marque une ligne au-dessus de beau fixe.

FAITS DIVERS

On lit dans la *Gazette de Mons* du 18 :

« Lundi dans la soirée, vers neuf heures, une grande foule s'est rendue à la station, où une réception officielle devait être faite à l'ambassade japonaise, qui se rendait de Paris à Bruxelles.

» Le gouvernement belge attachait, paraît-il, et non sans raison, une importance extrême à ce qu'une sympathique réception fût faite aux ambassadeurs japonais.

» On sait, en effet, que depuis que le parti favorable aux étrangers a triomphé au Japon, cet empire tient à nouer des relations suivies avec toutes les nations du globe.

» Les ports du Japon étant maintenant largement ouverts au commerce universel, la Belgique y a immédiatement trouvé un débouché important pour ses machines à vapeur et tout ce qui concerne l'industrie des chemins de fer ; car, la première parmi les puissances asiatiques, le Japon vient d'inaugurer son premier chemin de fer.

» C'est ce qui explique la nomination récente d'un ambassadeur belge au Japon, M. de Groote, avec un traitement de 35,000 fr. annuellement.

» La mission japonaise a pour but d'aider à la rénovation complète de cet empire en parcourant le monde entier et en cherchant dans tous les grands centres de civilisation les choses utiles qui pourraient trouver leur application en Asie.

» S. M. le Roi des Belges avait envoyé hier à la frontière une mission chargée de recevoir l'ambassade japonaise et de la conduire à Bruxelles.

» Cette mission se composait de MM. De Groote, directeur au ministère des affaires étrangères ; du lieutenant-colonel d'état-major baron Jolly, sous-directeur de l'Académie militaire ; du baron d'Anethan, et de M. le comte d'Ursel, secrétaire de légation.

» Ces messieurs sont descendus dans l'après-midi à l'hôtel du gouvernement provincial et sont partis de Mons pour Quévy, vers 7 h. 1/2, par un train spécial composé de voitures de la cour.

» Ils étaient accompagnés d'un secrétaire japonais, lequel avait devancé les envoyés à Bruxelles ; et retenu pour eux des appartemens à l'hôtel de *Belle-Vue*.

» A neuf heures et demie, les ambassadeurs arrivèrent dans la gare ...

— La présence à Bruxelles de l'ambassade japonaise, qui rappelle l'attention sur les relations de la Belgique avec les pays lointains, donne un intérêt d'actualité à l'éphéméride suivant. Il y a treize ans, le 17 février 1860, le duc de Brabant, depuis Léopold II, prononça au Sénat un discours qui fit sensation et qui roulait sur la situation générale du commerce belge. Le prince venait de faire un long voyage en Italie, en Orient, avait visité l'Egypte, la Chine, etc.

— S. M. la Reine s'est promenée lundi à Bruxelles en calèche découverte.

— On vient de découvrir dans la commune de Saint-Remy, dit l'*Union de Charleroi*, d'importants gisements de cette qualité de limonite qu'on appelle vulgairement *mine de fer fort*.

Ce minéral de toute première qualité, et bien supérieur à celui que ce pays a jusqu'ici livré à l'industrie, se trouve à 25 minutes de la station de Chimay et à proximité de la belle route de Sultes.

L'extraction, qui peut être commencée à ciel ouvert, est à concéder sur une contenance de plusieurs hectares.

— Un meeting des actionnaires du chemin de fer Grand-Luxembourg a eu lieu à Londres, sous la présidence de M. O. Fenton.

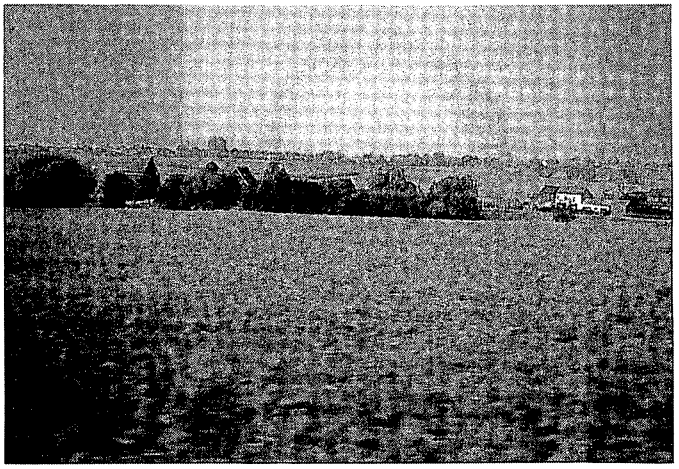
Le président a déclaré qu'au moment du meeting précédent, il croyait la cession de la ligne du Luxembourg à l'état de fait consommé et que les intéressés avaient obtenu d'excellentes conditions. Mais quelques jours plus tard, on vit paraître dans les journaux de Paris et de la Belgique des articles dont les uns traitaient la question au point de vue politique, les autres au point de vue industriel.

Bientôt après, le ministre des finances belge se vit assiégé de députations pour lui demander de ne pas sanctionner la combinaison projetée. Le 11 janvier, les directeurs reçurent l'avis que le gouvernement belge refusait de sanctionner le bail. Sur ce point, le président a prié le meeting de garder le silence dans l'intérêt commun. A la demande expresse du gouvernement belge, un article a été inséré dans le projet de cession de la ligne portant qu'au cas où l'arrangement présent viendrait à faillir par une cause quelconque, le gouvernement susdit serait libre de se substituer au lieu et place de la Compagnie de Luxembourg, et de conclure avec cette Compagnie un arrangement dans les termes du traité proposé.

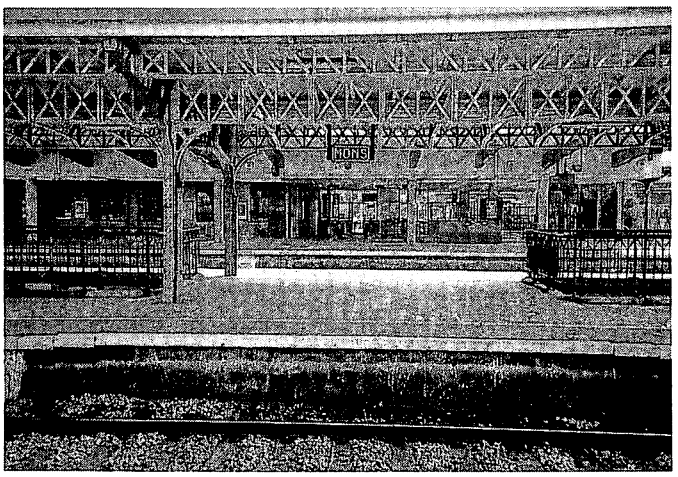
Lorsque les directeurs furent informés que le gouvernement belge refusait sa sanction à la combinaison primitive, ils pensèrent que le meilleur parti à prendre était de ne rien faire (*to do nothing*). Dans le cours de la semaine, ils ont reçu communication d'un nouvel arrangement — le président en a donné lecture — concurremment avec le premier projet soumis à la Compagnie Belge-Luxembourg. Une longue discussion a suivi. Plusieurs actionnaires trouvaient que les conditions nouvelles n'étaient pas équivalentes à celles que contenait le premier projet de cession. D'autres demandaient l'ajournement du meeting.

Le président, répondant aux uns et aux autres, a déclaré que la position des actionnaires privilégiés ne subira aucun changement, si ce n'est en bien. Il a proposé une résolution portant que : « Les actionnaires ...

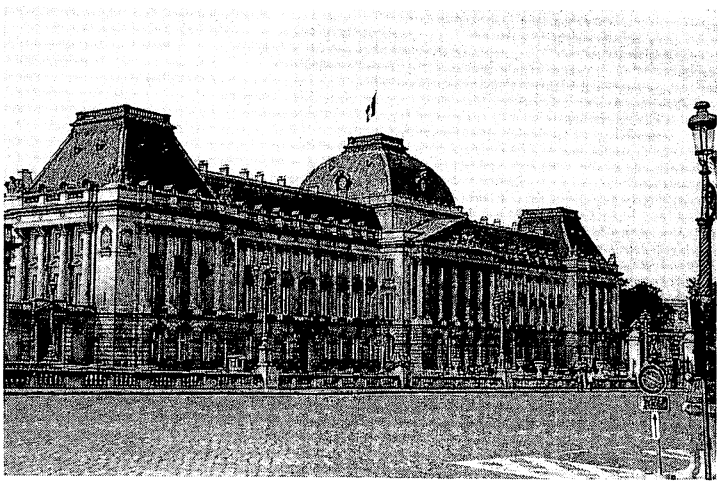
『ジュルナル・ド・リェージュ』紙（2.19付）
にのった岩倉一行の記事



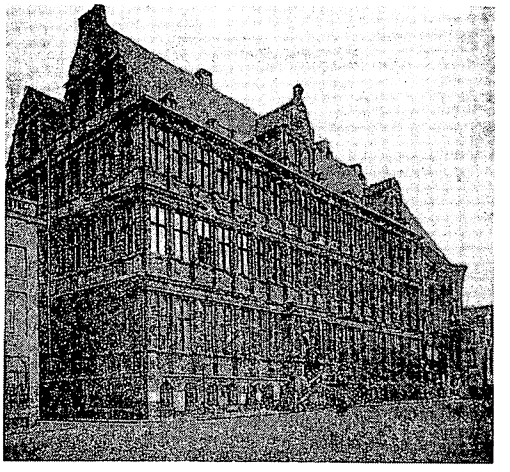
モンスからブリュッセル間の田園風景
（筆者撮影）



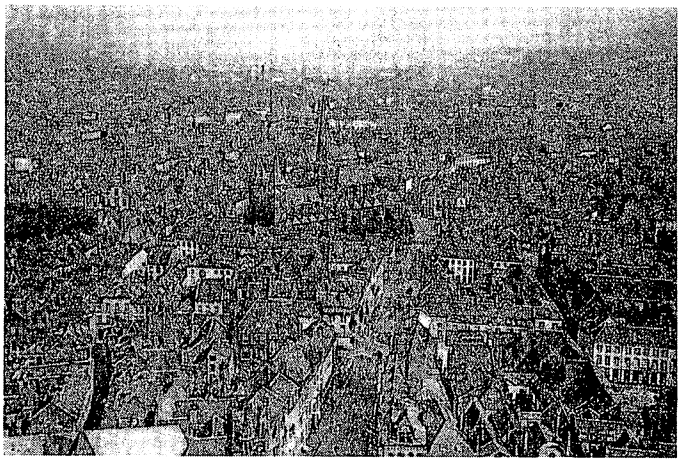
いまのモンス駅のプラットフォーム
（筆者撮影）



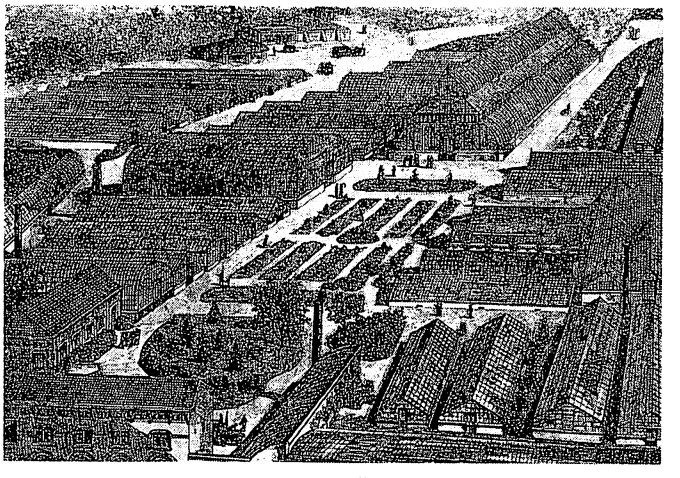
ブリュッセルの王宮
（筆者撮影）



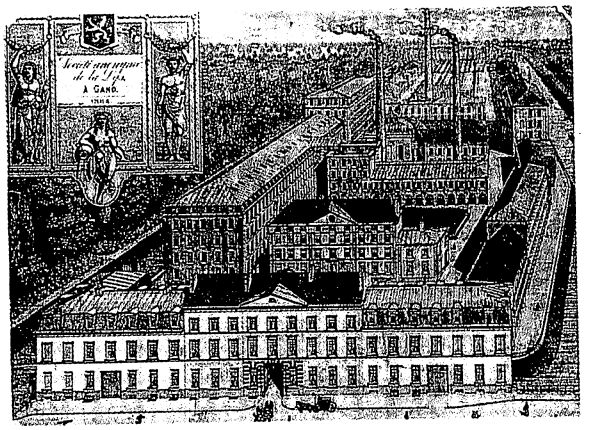
ゲントの市庁舎
(Oda van de Castyne 著 Promenades à Travers Gand［刊行年不詳］より)



ゲントのパロラマ図
(Oda van de Castyne 著 Promenades à Travers Gand より)

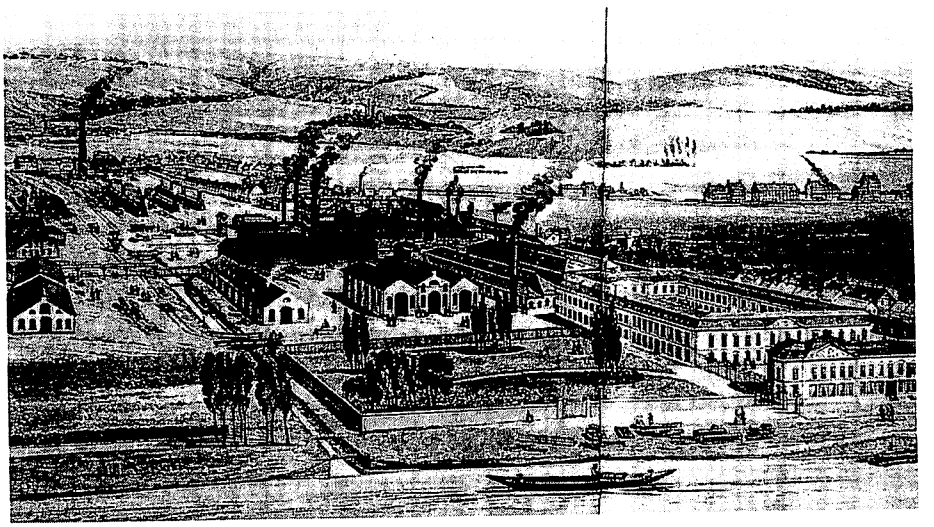


ジャン・リンデンの花園（ゲント）
(By courtesy of Gent-Stadsarchief)

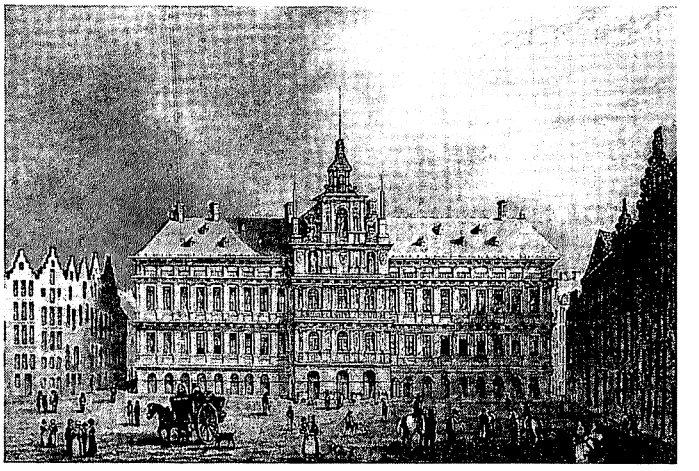


ラ・リス氏の亜麻の製糸工場（ゲント）
(By courtesy of Gent-Stadsarchief)

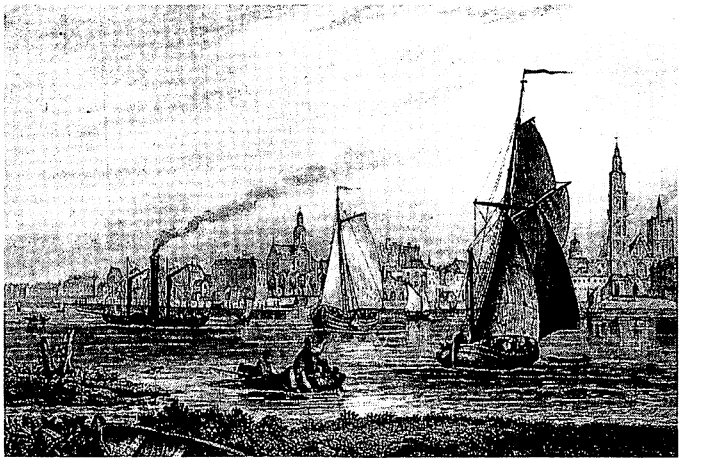
リェージュ州知事ルーズマンスの肖像
(By courtesy of Liège-Stadsarchief)



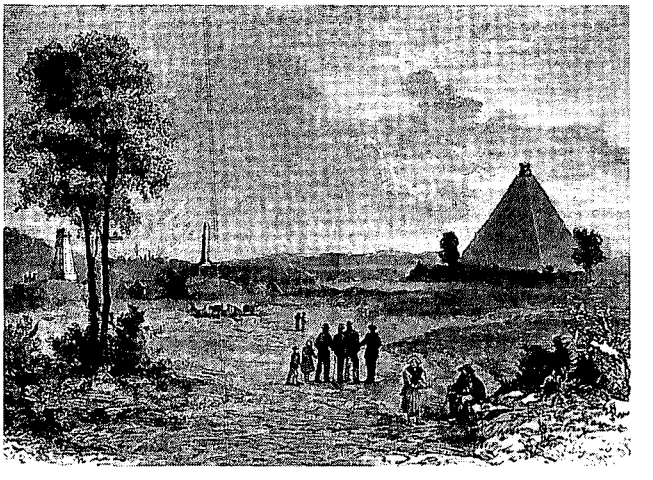
セランのジョン・コッケリル社
(By courtesy of Liège-Stadsarchief)



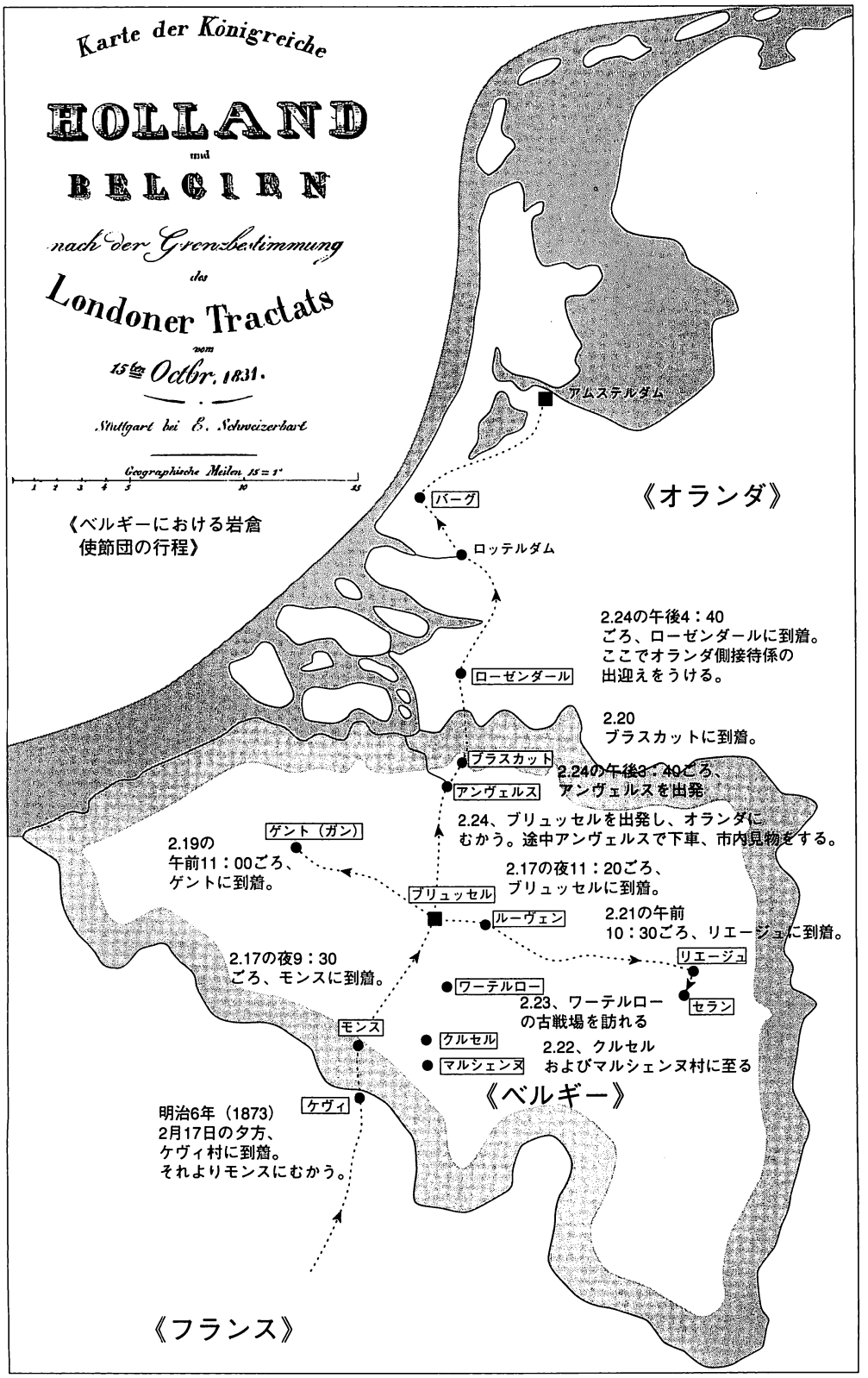
アンベルスの市庁舎
(The Continental Tourist, and Pictorial Companion, Black & Armstrong 社 1861 年刊より)



アンベルス市とスケルデ川
(The Continental Tourist, and Pictorial Companion, Black & Armstrong 社 1861 年刊より)



ワーテルローのライオン像の丘の図
(筆者蔵)


Karte der Königreiche
HOLLAND
und
BELGIEN
nach der Grenzbestimmung
des
Londoner Tractats
vom
15ten Octbr. 1831.
Stuttgart bei C. Schweizerbart
Geographische Meilen, 15 = 1°
《ベルギーにおける岩倉
使節団の行程》
アムステルダム
《オランダ》
バーグ
ロッテルダム
2.24の午後4：40
ごろ、ローゼンダールに到着。
ここでオランダ側接待係の
出迎えをうける。
ローゼンダール
2.20
ブラスカットに到着。
ブラスカット
2.24の午後3：40ごろ、
アンヴェルスを出発。
アンヴェルス
2.24、ブリュッセルを出発し、オランダに
むかう。途中アンヴェルスで下車、市内見物をする。
ゲント（ガン）
2.19の
午前11：00ごろ、
ゲントに到着。
2.17の夜11：20ごろ、
ブリュッセルに到着。
ブリュッセル
ルーヴェン
2.21の午前
10：30ごろ、リエージュに到着。
リエージュ
2.17の夜9：30
ごろ、モンスに到着。
ワーテルロー
2.23、ワーテルロー
の古戦場を訪れる
セラン
モンス
クルセル
2.22、クルセル
およびマルシェンヌ村に至る
マルシェンヌ
《ベルギー》
ケヴィ
明治6年（1873）
2月17日の夕方、
ケヴィ村に到着。
それよりモンスにむかう。
《フランス》

The Iwakura Mission in Belgium

This essay deals with the Japanese mission led by Tomomi Iwakura (1825～83), Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary in Belgium. The mission stayed in Belgium only for 8 days. The chief object of the mission was to present credentials from the Emperor Meiji to the Belgian king and to sound out the intentions regarding the revision of the treaty. Besides, the mission was to investigate Belgian society in general.

This article is divided into four parts.

1) The schedule of the Japanese mission in Belgium.
2) The view of Belgium held by the private chroniclers of Iwakura.
3) How the Japanese mission was seen by the Belgians.
4) The response of the Belgian government to the Japanese ambassador.

The account of the travels to the States and Europe of Ambassador Iwakura and his retinue was compiled in five volumes of books called "Tokumeizenkentaishi Beiokwairan zikki" published in the 11th year of Meiji (1878) by the Hakubunsha, Tokyo. Although this is a very interesting account of their travels and their keen observations of Western civilization during the journeys, the books are full of inaccurate transcriptions of proper nouns which have caused much confusion.

However, the newspaper articles on the Japanese embassy in each country they visited give clues to the correct reading of the proper nouns, supplying us with important knowledge about the activities of the mission.

The object of this essay is to clarify as much as possible the daily activities of the Japanese embassy in Belgium, based on the Belgian newspapers[1].

The chief members composing the embassy were as follows:

Tomomi Iwakura	Junior Prime Minister, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary	
Takayoshi Kido	Councillor of State	vice-ambassadors
Toshimitsu Okubo	Minister of Finance	
Hirobumi Ito	Acting Minister of Public Works	
Naoyoshi Yamaguchi	Assistant Minister of Foreign Affairs	
Yasukazu Tanabe	First Secretary, Department of Foreign Affairs	
Noriyuki Ka	(Fourth?) Secretary, Department of Foreign Affairs	
Tadatsune Ando	Fourth Secretary, Department of Foreign Affairs	
Mitsuaki Nonaka	Accountant, Head of Register Office	
A certain Tomita	Accountant, Head of Register Office	
Takeichi Kume (Kunitake)	Private secretary of Iwakura, a chronicler of the Japanese embassy	
W. Parson	An American advisor to the Japanese embassy	
Sadajiro Kurimoto	Interpreter	
Kozo Sugiura	Interpreter and a chronicler	
A certain Fukui	Medical doctor[2]	

On the 17th of February in 1873, the Ambassador and his retinue left France for Belgium from Gare de Nord in Paris, arriving at Quévy, a border village in France. At Quévy, they were welcomed by the members of the reception commitee of Belgian government. They were De Groote, director of Foreign Affairs and the new Belgian ambassador to Japan, Baron Ferdinand Jolly, lieutenant colonel of General Staff Office, Baron Albert d'Anethan, and Count Charles d'Ursel.

After exchanging mutual greetings, the Embassy set out again on their

journey. At about 9 : 30 p. m. the train arrived at Mons, a border town in Belgium, the Ambassador and his staff were welcomed by the Belgian soldiers presenting arms and playing the Japanese national anthem. After that the Japanese in European clothes were shown into the first class waiting room where they met other Belgian welcomers.

These were Prince Caraman-chimay, Governor of the Heinaut province, Dorez, Mayor of Mons, Dutilloeul, Lieutenant Colonel and Commandant in Mons, Colonel Demazieres who commanded the 3rd Chasers, and Parez, Greffier of the province.

In response to the address of the governor of the Heinaut province, the Chief Ambassador Iwakura responded through an interpreter as follows:

《Nous nous saurions trop vous remmercier, M. le Gouverneur, de la recéption brillante qui nous est faite au moment où nous entrons sur le territoire de la Belgique. Nous serons heureux de faire connaître à S. M l'Empereur l'excellent accueil que nous venons de recevoir, et de lui rapporter les paroles que vous avez bien voulu adresser à ses envoyés. Nous sommes touchés et reconnaisans à la fois, et nous y répondons par toute notre sympathie.》 [3)]

Here again they got aboard a special train set by the Royal family and proceeded to Brussels. It was at 11 : 20 p. m. when the Embassy finally arrived at Gare du Midi, Brussels, where they rode in separate carriages, and went to "Hôtel Belvue et de Flandre" (another name "Hôtel Belvue" located at Place Royale 7) which had prepared for the Japanese.

At 1 p. m. on the 18th of February, the Chief and Vice-ambassadors with some followers went to the Royal Palace riding in separate carriages, to be granted an audience with King Leopald II. When they arrived there, they were welcomed by the Imperial Guards who presented arms and a musical band.

After exchanging mutual greetings, the Embassy retired from the

audience room and were shown into the room of the Queen, who was in mourning. In the evening a dinner party was held in their honour at the palace at which the Japanese presented themselves.

At about 10 a. m. on the 19th of February, the Japanese Embassy went to Ghent by a special train to inspect industrial establishments. When they arrived in Ghent at about 11 a. m., they were welcomed by Count 't Serclaes, Governor of the province, Kerchove de Denterghern, Mayor of Ghent, De Graeve, Greffier of the province, and Captain Stuckens, Adjutant of the General Commandant of the province[4].

After exchanging the official salutations, the Japanese visited the cotton spinning company owned by M. F. Louisberghs, the establishment of horticulture of Jean Linden, and the weaving shop of La Lys in turn. The Japanese showed keen interest in weaving machines in the factories. As regards the behaviours of the Embassy, *《11s ont fréquement des notes spécialement sur les forces motoriees, que nous employons.》*[5] After finishing a tour of observation, they had lunch in the city hall, returning to Brussels at 4 : 05 p. m.

It was very cold on the 20th of February. The Embassy accompanied by De Groote and Jolly proceeded to Antwerp, whence they drove to "Polygone de Braesschaet," the large Belgian artillery range located near the village of Braesschaet, some 16 kilometers to the N E of Antwerp. In the firing range, the Japanese actually inspected various firings of field artilleries. After the inspection, they were offered lunch in the officers' club, returning Brussels via Antwerp at about 6 : 00 p. m.

On the 21st of February, the Embassy started for Liège by a special train at 8 : 00 a. m., arriving at Station des Guillemains in Liège at 10 : 30 a. m. They were welcomed by Pascalde Leusemans, Governor of the province and others to say a word of welcome at the station.

The Japanese went in separate carriages along the river Meuse to the

village of Seraign, 6 kilometers south of Liège. They visited the glass works at Val-Saint-Lambert established by John Cockrill (1790-1840), an Englishman, and the iron-works and factories founded by the same Englishman. The Embassy officials were entertained with luncheon in the latter factories, returning Brussels before 8 : 00 p. m.

On the 22nd of February, the Embassy divided into two parties. The group led by Iwakura left Brussels at 9 a. m. for the village of Courcelles located NNW of Charleroi, the center of the S. Belgian iron industry, arriving at Courcelles at 9 : 30 a. m. The director named De Marmol waited for the Japanese with carriages.

The Japanese first visited the plate glass works and then proceeded to the village of Marchienne by carriages to inspect the iron-works of Providence, being accompanied by Théophile and Jules Ziane. 《*Ils parurent prendre un vif intérêt aux opérations du laminage et du matelage*》[6].

Whereas the group with Kido occupied themselves with inspecting some establishments in Brussels. The group first visited the factory of Tasson and Washer (rue de l'Astronomie), 《*où ils ont admiré les parquets que cette maison exécuté pour le palais du Roi, ainsi que différents meubles destinés à l'exposition de Vienne, entre autres celui, pour les armes de guerre de Liège. Le trarail mécanique du bois l'a beaucoup intéressé.*》[7]

Then They visited the chassis factory owned by Jones (rue de Laeken), and other firms making railway equipment owned by the Société Belge, and a workshop of enamelled ironware owned by Delloye-Massor (Chaussée d'Anvers). At 6 : 00 a. m., the Embassy presented themselves at a farewell dinner party held by the Royal family, and then enjoyed the presentation of Tannhäuser in the theatre.

It snowed on the 23rd of February, the Chief Ambassador Iwakura, Vice Ambassador Yamaguchi, the First Secretary Tanabe and interpreter Kurimoto

called at the Foreign Office to sound out the Belgian views on the revision of the treaty and so on. While Kido and others drove to Waterloo (16 kilometers SSE of Brussels) to see the old battlefield, where the British under Wellington and the Prussians under Bücher decisively defeated Napoleon June 18, 1815. The group returned Brussels at about 4 : 00 p. m.

On the 24th of February, the Iwakura Mission left Belgium for Holland at 9 : 00 a. m. by a special train, stopping over at Antwerp. When the train arrived at Antwerp at 9 : 50 a. m., the Embassy was welcomed by Pycke, Governor of the province, De Wael, Mayor of Antwerp, General Dens of the province and so on.

After exchanging mutual greetings, 《*L'Ambassade a pris place dans cinq voitures et a visité nos établissements maritimes, le Musée et les principaux monuments de la ville. Vers trois heures, les ambassadeurs sont repartis par le même train pour la Capital.*》[8)]

Thus the eight days of the trip of the Iwakura Mission in Belgium was over.

Kunitake Kume's general views of Belgium :

《In terms of its territory and population, Belgium is as big as Kyūshū Island in Japan. Although Belgium is surrounded by big countries, she stands on her own legs despite her smallness without any protection or interference from other countries.

The Belgian economic power exceeds that of the European Powers. The Belgians are hardworking people, living happily. Although the land is infertile and swampy, I was impressed by this small country in many ways. The welfare of the state depends not so much on politics but on the unity of the whole nation and their cooperation.

The administration is a paragon of a nation. The footpaths in the fields

remind of me the ridges between ricefields in Japan. The farm villages in Belgium are alike in appearance with those in Japan.

The prosperity of Belgian industry reminds me of that in England. Towns and villages are flourishing. Belgium abounds in iron and coal. Iron industry is the most prosperous in Europe. Coal mining is the origin of industry in Belgium. The quality of coal ranks the second place except England. In the first place the most prosperous industry in the country is iron manufacturing, secondly the cotton or flax spinning industry, and thirdly glass manufacturing.

The streets in Brussels are closely lined with large and small stores. The paved streets are narrow and irregular, though they are convenient for walking or transporting. There are many white houses in the Capital, shining brightly here and there. At night streets are lit by gas, emitting pale light. Seeing the light I feel as if I were in Paris.

The only trade port in Belgium that enjoys the popularity as a good port in Europe is Antwerp. What amazed me in Antwerp were the such state establishments or buildings such as the docks, batteries, the Exchange, the City Hall and so on.

The spirit of independence or freedom pervades Belgium. But we should not mistake freedom for self-indulgence. In order to maintain the prosperity of the whole nation and to guard their freedom, the government should adopt a prudential policy.》[9)]

The Belgian view of Japan and the Japanese Embassy :

Up until the Meiji Restoration, Japan was regarded as a visionary or barbaric country which closed its door to the world. Japan was supposed to be a country whose staple exports were laquerware or porcelain. After the restoration of Imperial rule, the image of Japan was changed in Western eyes.

In their views:

Japan is an attractive and a poetic country which abolished the feudal system across the nation. The Belgian people knew through the newspapers that Japan had been striving for national reform with strong will and energy.

It appears to me that a rumour was going around that the Japanese wore topknots and two swords, being dauntless in their spirits. But contrary to the expectations of the Belgians, the Embassy they saw dressed in European style. They were quiet-looking, unsociable gentlemen. Their faces were written all over with wrinkles[10], though looking young at first sight. The Belgians were disappointed a little to see the Japanese in Western clothes.

The Belgians' wish and inmost thoughts in welcoming the Japanese Embassy:

Iwakura's chief official duties were to present a message from the Emperor to the King in Belgium as well as to ascertain the intentions regarding the revision of the treaty, and to inspect Belgian society in general.

The Japanese-Belgian talks[11] were held only once at the Foreign Office in Brussels on the 23rd of February, 1873. Those present were Tomomi Iwakura (Chief Ambassador), Naoyoshi Yamaguchi (Vice-ambassador) Yasukazu Tanabe (The First Secretary), Teijiro Kurimoto (The 2nd Secretary and interpreter), August de Baron Lambermont (A Minister Extraordinary and Plenipotentiary, Secretary-General of the Foreign Office, acting minister of Foreign Affairs), Jurey Malo (The Minister of Finance), Charles de Groote.

Baron de Lambermont started talking after exchanging greetings, leading the way. Iwakura explained the mission entrusted to him by the

government, and also described the abolition of the feudal system, and the restoration of the imperial regime.

Lambermont asked Iwakura to tell him his opinion regarding Belgium. The former continued to talk as if he took no notice of Iwakura's wishes at heart. Lambermont told Iwakura what Belgium could offer to further the modernization of Japan in terms of administration, education, military affairs, railway construction, trade and industries. Iwakura did not have a positive response to the offer, but only thanked him for his kind attentions. Lambermont summarized the general, national conditions in Belgium.

The topic of talk turned to religious tolerance. He pointed out that Japan's inhuman treatment and persecution of the Christians aroused indignation and mistrust among the Christian countries. Iwakura said positively that the strict restrictions on the Christians was relaxing and that the government hoped to attain the freedom of religion. Lambermont was pleased with that remark and hoped that Japan would lift the ban on paganism.

Iwakura's primary concern was the revision of the treaty. As regards this problem, Lambermont said that he would give instructions to the new minister to Japan, asking him to enter into negotiations with the Japanese government with a view to conclude a new treaty. Since Lambermont knew that Iwakura was not given full power to decide anything, the former judged it premature to enter into actual negotiations.

In reading through the memorandum of the official conference between Iwakura and Lambermont, we notice that the Belgian government was eager to enter into the Japanese market, to sell its products or offer its technologies and capital to Japan[12]. The visit of the Japanese embassy to Belgium was a favorable opportunity for her to strengthen mutual commercial ties more strongly. However, Belgium was not so successful in selling its products to Japan, contrary to expectations.

Although Belgium tried in vain to enlarge the commercial market in Japan, later she made a contribution in some spheres of Japan's modernization. When Japan established the Meiji Constitution, it translated the laws of England, France, Prussia and Belgium, studying them for future reference[13]. The most notable learning from Belgium was the foundation of the Bank of Japan (1882), which was modeled after the Belgian Central Bank[14].

Moreover, when Japan founded the Department of Home Affairs and Tokyo Metropolitan Police Board in the 1870s, based on the proposal presented by Toshiyoshi Kawaji (1836~70), a police superintendent, the ideal of Belgian police system was under consideration. Kawaji stayed in Belgium for a month in the spring of 1873, investigating the police system.

It is interesting to notice that he found the lofty ideal of the police in "the protection of citizens and administration services to the people."[15] Japan owes not a little to Belgium.

In writing this essay I made use of Belgian newspapers in both French and Dutch related to the Iwakura Mission as primary source for the study of the Embassy in Belgium.

In conclusion I'd like to thank the Belgian Embassy in Tokyo, Archives de l'état in Liège, Stadsarchief in Ghent, Bibliothèque Royale Albert I, Archives du Ministère des Affaires Etrangères in Brussels, the university libraries at Waseda and Sophia as well as The Historiographical Institute, the University of Tokyo, for their various kindnesses.

Personally, I am very much obliged to Mitsuro Katsuyama (OCS Brussel Office), Dr. Paulette Pieyns-Rogo, Dr. Francoise Peemans, Aryan van der Werf (reseacher), Ingeborg Verplancke (lecturer), Prof. Willy van de Walle at Katholieke Universiteit in Leuven.

10 April 2000

Prof. Takashi Miyanaga

Notes

1) The Belgian newspaper consulted were *"Journal de Liège", "L'Independance", "Le Nord", "Journal de Gand", "L'Echo du Parlement", "Journal de Charleroi", "Het Handelsblad van Antwerpen" "Journal d'Anvers"* and so on.

2) cf. *"L'Independance"* (1873. 2. 18)

3) cf. *"Journal de Liège"* (1873. 2. 19)

4) cf. *"Journal de Gand"* (1873. 2. 20)

5) *ibid.*

6) cf. *"Journal de Charleroi"* (1873. 2. 23)

7) cf. *"Journal de Liège"* (1873. 2. 24)

8) cf. *"Jaunal de Liège"* (1873. 2. 25)

9) cf. *"Tokumeizenkentaishi Beiokwairan Zikki"* (Iwanamishoten, Tokyo, 1983), vol. 1.

10) cf. *"Journal d'Anvers"* (1973. 2. 23)

11) cf. Memorandum d'une conférence officielle qui'a eu lieu le 23 février 1873, au Ministère des Affaires étrangères à Bruxelle (document preserved at *Archires du Ministère des Affaies Étrangères* in Brussels). I also consulted with *"Dainihon Gaiko Monjo"* (Nihon KOKUSAI Kyokai, Tokyo, 1938, vol. 6, 97.)

12) cf. Prof. W. van de Walle: *"Belgium 17-24 February 1873"* (The Iwakura Mission in America and Europe-A New Assessment, Meiji Japan series 6).

13) cf. *"Nihon Berugi Kankeishi"* (Hakusuisha, Tokyo, 1989), 162～169.

14) *ibid.*, 159.

15) See note 13, 111.